

目次

1. 事業概要	1
1.1. 事業の背景・趣旨	1
1.2. 事業実施概要	3
1.3. モデル事業の進め方	6
1.4. モデル事業に関する留意事項	9
2. 参加園でのモデル事業実施	10
2.1. 南千住七丁目保育園	10
2.2. せせらぎ保育園	21
2.3. まちの保育園小竹向原	31
2.4. 3施設での活動を踏まえて	41
3. 活動報告会の開催	42
3.1. 活動報告会概要	42
3.2. 活動報告会の様子	43
3.3. 各園からの活動報告	44
3.4. パネルディスカッション	47
3.5. 参加者アンケート結果	50
4. モデル事業を踏まえたまとめ	52
4.1. モデル事業の成果	52
4.2. 都市部で自然を活用していくための課題	53
4.3. 自然を活用した保育のさらなる促進に向けて	54
【参考】 有識者会議の構成メンバー・開催概要	55

1. 事業概要

1.1. 事業の背景・趣旨

事業検討の背景

- 東京都は、待機児童の解消に向けて、都独自の整備費補助や都有地の活用等により区市町村を支援し、多様な保育サービスの整備を進めてきた。
- こうした取組により、保育サービス利用児童数は年々増加し、平成31年4月時点の待機児童数は前年から1,724人減り、3,690人となった。
- 保育の受け皿整備に向けた取組が展開される中、国をはじめ、保育の質の確保・向上に係る検討、取組が進んできている。
- 保育の質を高めるための取組として、近年、自然環境を活用した保育への関心が高まっており、多様な取組が行われてきている。
- 東京都においても、東京ならではの自然環境を活かし、独自の保育モデルを検討、整備し、さらなる保育の質の確保・向上を目指しているところである。

モデル事業実施目的

- 自然の中での体験や自然環境を活用しての教育は、子供の主体性や想像力、思考力、コミュニケーション能力などに代表される非認知能力を養うために効果的であるということを踏まえ、保育所等において、自然を活かした保育活動を通じて幼児教育がさらに充実することを最終的な狙いとしている。
- 東京都の特性を活かし、より効果的な取組となるよう、東京都内の自然環境を活用して保育を行う東京都版モデルを作成することを目標として事業を実施した。

1. 事業概要

1.1. 事業の背景・趣旨

自然の活用が期待される背景

自然を活用する主な狙い

「非認知能力を育む」こと

【幼児期に習得が期待される非認知能力の要素】

問題解決力

思考力

協調性

コミュニケーション力

主体性

自己管理能力

自己肯定感

探究心

共感性

道徳心

倫理観

規範意識

公共性

出所：一般財団法人日本生涯学習総合研究所『「非認知能力」の概念に関する考察』（平成30年3月27日）より

自然を活用する意義・意図

非認知能力は自然を活用しないと育むことができないか？



自然の活用が必須ではない
(ほかのやり方でもできる)

ではなぜ自然活用なのか？？



自然を活用することでより効果的に
非認知能力を育むことができる

それはなぜ？？



自然の特性を活かした「遊び」等を通じ、
「集中」「没頭」も起きやすく、「気づき」を得やすくできる等の長所がある

1. 事業概要

1.2. 事業実施概要

基礎調査から得られた示唆



日常的・継続的に実施することが重要

- ・ 数回の自然体験などで得られる効果は限定的
- ・ 連続性のない取組よりも継続性を念頭に取組を進めることが重要
- ・ 自然を活かした活動だけで考えるのではなく、園で実施しているほかの取組との関係性、連動も考慮して自然を活用した取組を進めて行くことも必要



やることを決めるのではなく、主体性を引き出すアプローチが重要

- ・ 全員で同じアクティビティを行う必要はなく、子供それぞれの自主性や主体性を引き出すための工夫がより重要
- ・ 何かを教えるのではなく、促し、引き出すためにはコーチング・ファシリテーション型の対応が求められる
- ・ 保育者側の自然に係る体験・経験も重要な要素



保育者の意識を変えていくことも必要

- ・ 保育者側の自然での体験、経験が少ないこともある
- ・ 保育者の取組への理解を深め、経験を重ねることにより効果的な取組につながる
- ・ 保育者の理解を深め、子供との関わりの意識等を変えていくことも重要

自然を活用するうえで大事なこと

✗ 豊かな自然、恵まれた自然環境

あるに越したことはないが必須要件ではない
自然の活用はあくまで手段

✗ 練り上げられたカリキュラム

自主性を重んじる工夫が重要
何かを覚える、同じことをするのが狙いではない

◎ しっかりとした目的の設定

何を実現するために自然を活用するか
そのために何をすべきかの設計

◎ 目的に照らして適切な環境と運用

環境づくりは工夫次第で改善可能
主体性・自主性を引き出すための工夫が大事

◎ 継続的・日常的な活動化

スポット的な活動では効果は限定的
園の通常活動に組み込む形で考えることが必要

◎ 保育者側の意識・経験

保育者の意識を変えることも必要
自らが経験しておくことも重要

○ 関係者の巻き込み、ネットワーキング

保護者やそれ以外の関係者の理解
地域での協力関係の構築

自然をうまく活用して多様な経験をしてもらうこと、気づきを得ることなどが狙い
自由な活動を促進するための基盤を作っていくことが重要

1. 事業概要

1.2. 事業実施概要

自然の活用に向けて気をつける点

自然の中で保育を行うことだけが目的ではなく、自然を活かして気づき等を促す“きっかけ”とすること

- ◆ 施設の考え方、方針や近隣の環境等も考慮して独自の取組を検討していくことが重要
- ◆ 自然の活用に一律の正解はない（モデル事業はあくまで一例）
- ◆ 活用方法は多様であり、自然豊富な公園や遠方での活動だけではなく、身近な自然にも気づくことが狙い

利用できる身近な資源を活かすこと、視野を広げて利用可能な資源を探すこと

- ◆ 公園でもできること、できないことがある
- ◆ 周辺環境で使える場所はあるか、何ができるかを把握しておくことも大切
- ◆ 近所の神社や企業の庭園、道端の茂み、個人宅の樹木など、視野を広げれば活用できるものもある
- ◆ 近所に豊かな自然がないからとあきらめず、現状の環境で何ができそうか、という前向きな視点が重要
- ◆ （現時点では知らなくても）実は行政の支援があることも・・・
例：保育所の園外活動支援

保育に自然を取り入れたその先として改めて一般的な活動を考えること

- ◆ 自然を活用することを目的とするのではなく、自然を活用した保育が子供のどんな育ちにつながるのかを見据えるとともに、園内での活動など、多様な活動全体を俯瞰して考えて行くことが重要
- ◆ 自然を活用した取組が定着してくると、ほかの活動でも多様な気づき等が生じることも多く、単発の取組ではなく、保育全体の一環と位置付けることが期待される

自然の活用方法は多種多様
周辺環境・資源も考慮して各園にあった取組を進めることが大事

1. 事業概要

1.3. モデル事業の進め方

モデル事業実施の基本方針

- 基礎調査結果を踏まえて、モデル事業の実施に向け、以下の基本方針を設定した。

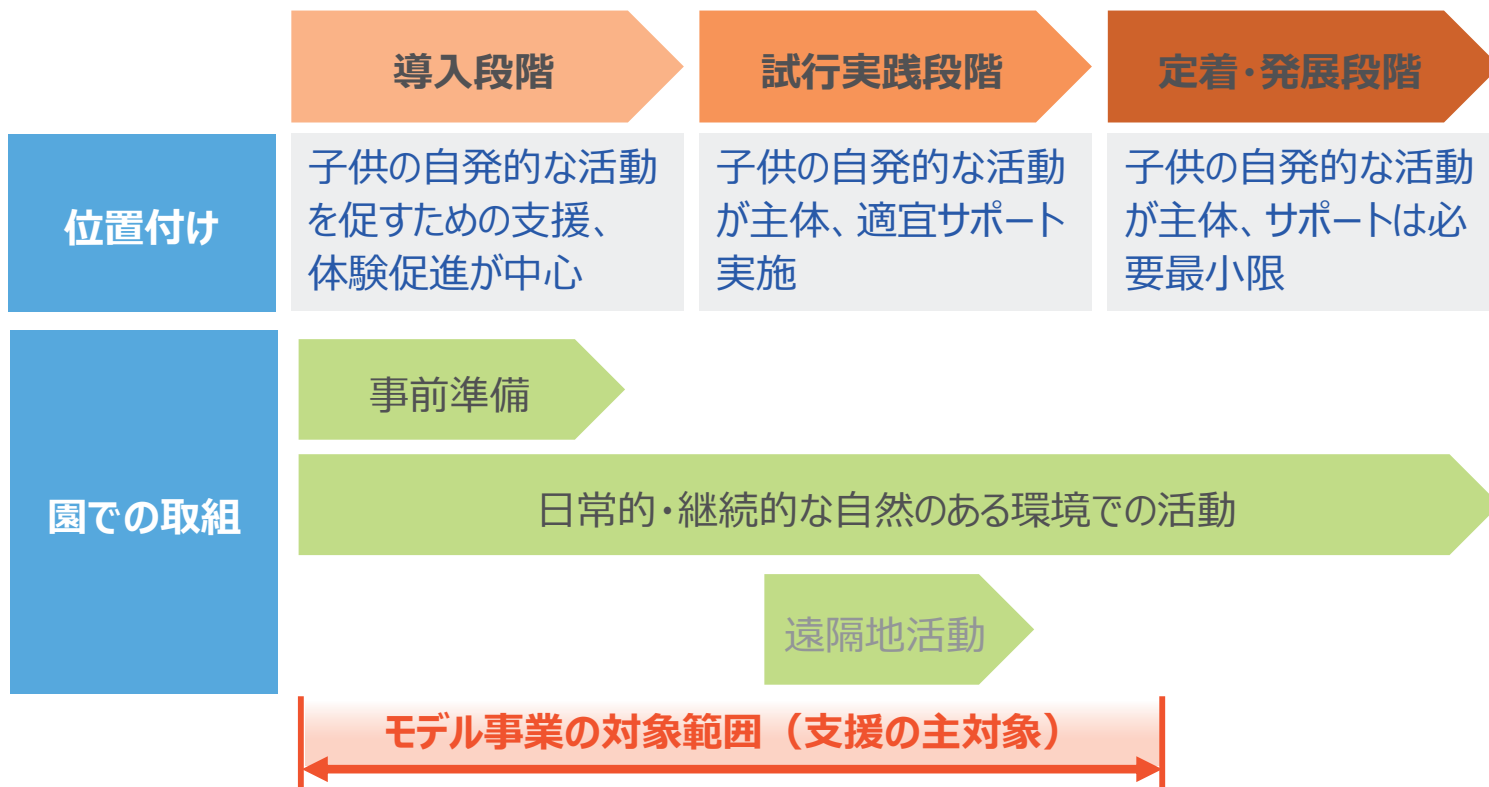
園の日常的・継続的な活動として実施する	<ul style="list-style-type: none">・ スポットで実施するのではなく、園の日常的な活動として実践いただくことを支援する（週1回程度の実践を想定）。・ 園の所在地近隣の自然のある場所（公園等）を主な活動拠点として継続した活動を実践する。・ 2～3か月程度の試行的な実践とする（以降、園で独自に継続できるように配慮）。
子供の自主性・自発性を促すため近隣の自然環境下で自由に遊ぶ活動を中心とする	<ul style="list-style-type: none">・ 自然環境下で子供の自主性、自発性が発揮されることを重視、決められたアクティビティを行うのではなく、環境を提供し、保育者によって自主性、自発性等を引き出すサポートがなされるように配慮する。・ 初期段階では活発な行動が生じないことが想定されるため、引き出すための支援も行う（呼び水としての働きかけ、サポート等）。
各保育所が実施している取組の一環としての自然の活用とする	<ul style="list-style-type: none">・ 自然活用は手段であることを考慮し、狙いに対して各園が実施している各種取組の一環として自然を活用することとする。・ 自然活用ありきではなく、自然という環境の特性を理解して、保育に活用するという前提を適切に伝えて行くように留意する。
保育者への情報提供、研修を実施、実践のポイントの共有を図る	<ul style="list-style-type: none">・ 現状、自然を活用した保育の実践は途上である園を対象としていることを考慮し、実施におけるポイント、留意点、推進方法等については情報提供、研修実施等の支援を行う。・ 事前の準備をサポートすることに加え、実践初期は適宜、事業アドバイザーが運営を支援する。
近隣での活動効果を高める狙いで遠隔地での活動を行う	<ul style="list-style-type: none">・ より自然環境が豊かな場所での活動を通じて、視野の拡大、活動の活発化、効果の高まりなどを期待し、都内で自然環境が豊かな場所での活動を行う。・ 遠隔地での活動は、1日のものとし、午前～午後で実施する。

1. 事業概要

1.3. モデル事業の進め方

モデル事業の位置付け

- 自然を活用した保育の定着に向けては、以下のようにいくつかの段階があるものと設定し、各段階に応じた支援を行いながら定着を目途とした活動を行った。
- 今回のモデル事業においては、導入段階から試行実践段階を主な支援対象として実施し、一部定着に向けた課題の検討等の支援を行った。



事務局からの支援概要

- モデル事業にあたっては、事務局から、自然を活用した保育の実践経験が豊富な事業アドバイザーを各園に派遣、活動同行を行う形で必要な支援を行った。

導入段階	試行実践段階	定着・発展段階
<事前準備> ・目的・趣旨、実践イメージ、想定効果等の事前説明実施 ・保育者向けの研修実施（リスク対応、簡易アクティビティ等） <実践活動> ・実践初期の活動への同行、実践に係る助言・支援 ・活動初期の様子記録	<実践活動> ・近隣地域での活動への同行、活動継続に対する助言 ・遠隔地活動の準備、実践、移動等の各種支援 ・活動の様子記録 <実践状況の確認・検証> ・活動状況の振り返り支援、生じた変化等の確認、検討支援	<実践活動> ・近隣地域での活動の同行（基本的にサポートはなし） ・活動の様子記録 ・活動の成果の把握、生じた効果の確認・検討 <今後の活動への示唆提示> ・以降の活動継続に向けた助言、課題認識へのアドバイス

1. 事業概要

1.3. モデル事業の進め方

参加施設の募集・選定

- モデル事業への参加施設の公募を行い、以下の3施設をモデル事業実施施設として選定した。
 - ①荒川区「南千住七丁目保育園」
 - ②清瀬市「せせらぎ保育園」
 - ③練馬区「まちの保育園小竹向原」

各施設での基本的な活動の進め方

- モデル事業実施各施設では、基本的に以下の流れで活動を行った。
- ただし、モデル事業開始時点における各施設の状況、取組への懸念等も考慮し、導入研修や初回の活動においては、それぞれの施設に適した取組となるよう配慮し、適宜事業アドバイザーからの支援を行った。

実施事項	内容
事前打合せ	<ul style="list-style-type: none">● 各園の保育での実践内容、年間の計画等も踏まえて、各園の取組に向けた考え方や不安、方針を確認。
導入研修	<ul style="list-style-type: none">● 各園の自然の活用状況等も考慮し、3園それぞれに対して個別の導入研修を実施。（導入期の施設では、具体的イメージを持ってもらうなど、体験型のアクティビティも実施。安全管理・対策についても講義形式で盛り込み、リスク管理面の不安へも対応。）
近隣での活動（初回）	<ul style="list-style-type: none">● 近隣の公園等での活動を実施。● 近隣での活動場所は原則、固定して実施。
遠隔地での活動	<ul style="list-style-type: none">● より自然豊かな場所での活動のため、比較的園から離れた広大な公園などを活用した遠隔地での活動を実施。● 遠隔地での活動は、午前～午後の1日を通じて実施。
近隣での活動（最終）	<ul style="list-style-type: none">● 近隣の公園での最終活動。初回からの変化を確認しつつ、各園で自然を活用することの継続性確保のために園が主体となり実施。
実践を踏まえた意見交換	<ul style="list-style-type: none">● 近隣での活動（最終）の終了後、保育者全体と意見交換を実施。● 事業全体を通じた子供や保育士の変化や気づき等について議論。

1. 事業概要

1.4. モデル事業に関する留意事項

モデル事業実施の前提・制約

- モデル事業実施に際して、事業実施期間、着手時期等の影響から、いくつかの制約、前提条件がある点にご留意いただき、モデル事業の実施内容についてはご覧いただきたい。特にご留意いただきたい点は以下の点である。

実施時期・期間が限定されていること	✓ 募集時期が9月～10月となり、モデル事業の着手が11月となったことから、秋～冬の3か月程度の実施となっており、限られた自然環境下での活動が中心となっている。
モデル事業実施施設の所在地域も限りがあること	✓ 本モデル事業では、荒川区、練馬区、清瀬市の施設での実施であり、一定の地域性はあるものの、山手線内側などの都心部などは対象施設がなく、地域の多様性という点では限定がある。
原則として近隣の公園等の施設での活動をベースとしていること	✓ 本モデル事業においては、取組のきっかけづくり、定着への足掛かりを優先し、近隣に拠点を定めての展開となっている。 ✓ そのため、自然の活用の方法等のバリエーションはある程度限定されている。
試行的な取組を開始した段階であり、他の施設で同じ内容を実施することが難しい面もある	✓ 今回のモデル事業では限定的な地域、限定された期間での試行的な取組であり、まったく同じ内容をすぐに他の施設等で実施することは難しい面がある。 ✓ 他の園での取組に際しては、それぞれの方針や置かれている環境を考慮する必要がある。
モデル事業実施施設においても周辺環境や自然の活用への取組状況は異なること	✓ モデル事業実施施設においても、それぞれ周辺環境やこれまでの自然の活用状況には差があるため、モデル事業の取組もそれぞれに異なるものとなっている。

制約・前提はあるものの・・・

モデル事業参加施設ではいろいろな“気づき”や“変化”もみられ、取組のきっかけ、後押し材料として意義のある活動が実施できたと考えており、ぜひモデル事業実施施設の取組を参考にしていきたい。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.1. 南千住七丁目保育園

基本情報

所在地	荒川区南千住
運営主体・種類	社会福祉法人、認可保育所
施設の規模 (年齢別人数)	0歳:12、1歳:16、2歳:22 3歳:35、4歳:34、5歳以上:30 計149人
周囲の自然環境	・ 荒川区南千住、隅田川沿いの住宅街に位置する。徒歩圏内には公園や神社、グラウンドなどが点在。
事業開始前の自然を活用した保育の取組状況	・ 月1回程度の頻度で近隣の公園で活動しているが、活動時間は10～20分程度。 ・ また、公園では主に遊具で遊ぶことが多く、時間・内容ともに自然との触れ合いは多くない。

園の周辺環境

- 園庭は150㎡程度、ゴムチップ製の地面であり、砂場および鉄棒・すべり台などを設置。園の敷地内には桜を植樹し、小さな花壇等を設けている。
- 活動場所は、メインとなる天王公園のほか、神社、水道局敷地内の芝生のグラウンド等。
- 最も活用頻度の高い天王公園は、保育所からの距離は約500mの場所に位置する。公園内は整備されており、敷地面積は約6,000㎡と比較的大きくかつ水辺や草木も豊富に存在。
- なお、やや遠方には汐入公園（約1.5km）や荒川自然遊園（約2.0km）など比較的自然環境豊かな場所もあるが、年に何度か遠足として活用する程度。



近隣の公園（天王公園）



園庭



2. 参加園でのモデル事業実施

2.1. 南千住七丁目保育園

モデル事業の実施概要

- モデル事業は、以下のスケジュール・内容で実施。

日程	実施事項	内容
2019/11/6	事前打合せ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 運営法人含む園関係者、アドバイザー等にて初回打合せ。現状の取組状況や今後の意向を確認しつつ、方針を決定。
2019/11/12	導入研修	<ul style="list-style-type: none"> ・ 園の保育者を対象にアドバイザーによる自然を活用した保育に関する導入研修を実施。 ・ グループディスカッション等により、改めて事業への不安や、事業を通じて取り組みたいことなどを整理。
2019/11/25	日常活動への同行 (初回)	<ul style="list-style-type: none"> ・ アドバイザーが5歳児クラスの日常活動へ同行。 ・ 天王公園にてアクティビティ実施後、保育者との振り返りを実施。
2019/12/17	遠隔地プログラムの 実施	<ul style="list-style-type: none"> ・ 光が丘公園にて遠隔地プログラムを実施。
2020/1/9	日常活動への同行 (最終)と振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日常活動の最終的な変化等の確認のため、アドバイザーが活動へ同行。 ・ 終了後、保育者全体と振り返りを実施。

事前打合せ・事前アンケート

- 事前打合せでは、周囲の自然環境が限られていることなどから、日常の保育活動において自然を活用することが少なかったこと、園としては今後は積極的に自然を取り入れていきたい意向であることを確認。
- また、事前アンケートでは、自然を活用した保育の実施にあたり、以下のような期待や懸念、不安があることが明らかになった。

事前アンケートでの主な意見

<自然を活用することへの期待>

- ・ 周囲の自然環境が限られているので、少しでもより多く自然に触れる機会を作っていきたい。
- ・ 自然に触れることで視野を広げるきっかけになってほしい。

<モデル事業参加に際しての不安や懸念>

- ・ 今ある自然や環境をより効果的に活用するにはどのようにすれば良いか知りたい。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.1. 南千住七丁目保育園

導入研修の実施

- 事前打合せや事前アンケートを踏まえ、保育者向けの導入研修を実施。
- まずは保育者の自然を活用することへの経験の少なさや安全管理に関する不安・懸念を軽減・払拭するため、アドバイザーによる保育者側の体験のためのミニアクティビティ、安全対策も含めた事前講習を中心に行った。
- 研修の最後には、ワークショップとして、保育者が今後やってみたい具体的な自然を活用した活動やその際の懸念点等について打合せした。

研修項目	研修内容
ミニアクティビティ (40分)	<ul style="list-style-type: none">・ 自然を活用した保育のポイントを実際に保育者が体験
講義 (60分)	<ul style="list-style-type: none">・ ミニアクティビティの狙い、質疑応答など・ 自然を活用した保育のポイントや事例等について解説
ワークショップ (15分)	<ul style="list-style-type: none">・ 自然を活用した保育を行うにあたっての不安、具体的なやってみたい活動などについて打合せ
まとめ (5分)	<ul style="list-style-type: none">・ 今後の取組について

ミニアクティビティ



ワークショップ



ワークショップでの主な意見

<今後具体的にやってみたい活動>

- ・ 泥遊びや水遊びなど、衣類が汚れてしまっても良いような遊び。
- ・ 木や岩といった高いところに登る、木の枝を持つなど、少し危ないかもしれないが子供の関心が強そうな遊び。
- ・ 田植えなど、日常ではできない体験。

<活動の際の懸念>

- ・ 転倒や転落、また木の枝が刺さるなどにより怪我をしないか。
- ・ 自由に遊ばせると迷子になる子が出ないか。
- ・ 保護者がこれらの活動をどのように考えるか。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.1. 南千住七丁目保育園

初回活動の実施

- 初回活動は日常的に活用し、慣れ親しんでいる天王公園で実施。
- 南千住七丁目保育園では、これまでは自然を取り入れた活動が限定的であったことから、まずは感覚をつかんでもらうため、モデル事業アドバイザーが主導して活動を実施し、活動に慣れるためにいくつかのアクティビティを提供。
- また、できるだけ保育者は子供の動きを制限せずに、「見守る」ことに意識して参加した。
- 前半は全体で「自然物探し」を、後半は3グループに分かれ、3つのアクティビティを行った。

アドバイザーからの説明



公園到着後、活動開始までの様子

- 公園到着後、子供たちはすぐにグループごとに整列。
- 活動までの間、整列した状態で待機しつつ、保育者の話を聞いていた。

整列して話を聞く様子



自然物探しの様子

- 丸い形・ギザギザ・ふわふわなどのお題が与えられ、自然物を探すゲーム。
- お題に出ていないハート型などを見つけて保育者に見せていくシーンもみられ、子供の自由な発想が生まれ始めたことがうかがえた。

自然物探しの様子



2. 参加園でのモデル事業実施

2.1. 南千住七丁目保育園

グループアクティビティの様子

- グループアクティビティでは、①探検チーム（公園内や公園外をグループで移動）、②秘密基地づくりチーム（設置場所、設置方法等、すべて子供が自由に行う）、③森のレストランチーム（紙皿を用意し、子供が自然物で自由におままごと）を実施。

- 普段の公園での活動では遊び道具は持参しなかったが、今回初めて持参し、子供たちもこれをきっかけに、さまざまな遊びに夢中になっていった。

森のレストラン



探検



秘密基地づくり



活動の振り返りの実施

- 活動後、保育者とアドバイザーにて振り返りを実施。
- 遊び方の工夫や子供を見守るという考え方について、以下のような意見があった。

振り返りでの主な意見

<遊び方の工夫について>

- これまでは具体的な遊び方を事前にイメージして遊び道具などの材料を準備することがなかったので、その点で子供たちの活動が広がったように感じた。

<子供を見守るという考え方について>

- 子供の行動に特に制限をかけなくても、危険な遊びにつながらなかったことが大きな発見だった。
- 制限をかけずに遊ばせたので、子供たちはいつもよりのびのびしていたと思う。
- さまざまな制限を取り払うということで心配な部分はあったが、最初に禁止事項をきちんと説明すれば、子供たちは意外とそれに沿って行動するということが分かった。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.1. 南千住七丁目保育園

遠隔地活動

- 遠隔地活動場所として、日ごろの活動場所より広く、自然豊かであり、また移動時間の負担を考慮し、練馬区の光が丘公園で実施。
- 遠隔地においては最低限の注意事項のみ子供に伝え、基本的には自由に活動してよいと説明。
- 当日のタイムテーブルは以下の通り。



- 9:30～ 南千住七丁目保育園を出発
- 10:30～ 光が丘公園に到着、探検しながら拠点に移動
- 11:45～ 拠点到着、雑木林散策・昼食
- 12:15～ 広場で自由遊び
- 12:30～ 午後の探検
- 14:30～ 光が丘公園を出発
- 15:30 南千住七丁目保育園に帰着

豊かな自然環境ならではの遊びを楽しむ様子

- 公園到着後、園内の豊富な自然に夢中になり、すぐに散り散りになって木の実や石、枝などを拾い集める様子がみられた。
- 自然物だけでなく、広大な空間や激しい起伏など、身近にはない地形にも関心を示していた。斜面を駆け下りたり、広場で走り回って遊ぶ子供も多くみられた。



← 入り口付近の広場で自然物を拾う様子

→ 落ち葉の斜面を駆け下りる様子



2. 参加園でのモデル事業実施

2.1. 南千住七丁目保育園

協調・協力して遊ぶ様子

- 広大な自然環境の中での具体的な遊びは、自然発生的に子供たちから生まれてくることもしばしば。
- そうした中で、複数名で一つの遊びをする姿や、特定の目的を達成するために協力する姿が頻繁にみられた。
- 広大な自然環境で活動することで、子供同士でのコミュニケーションがより活発になる可能性があることがうかがえた。

太い丸太を使いみんなで一緒に遊ぶ様子



拠点に友達を呼び、集める様子



活動の振り返りの実施

- 活動後、保育者とアドバイザーにて振り返りを実施。以下のような意見があった。

振り返りでの主な意見

<広大かつ豊富な自然環境下で自由に遊ぶ、初めての経験の中での子供の姿>

- 純粹に自然豊かな環境で、特に制限をかけずにここまで自由に遊ばせたことはなかったためか、大変表情豊かだったし、全身で遊びを楽しんでいたと思う。普段みられなかった、子供の持つ力強さも感じた。
- 初回活動ではアドバイザーに遊びを用意してもらったが、自分たちで自発的に遊びを見つけ始めるようになった。

<保育者のかかわり方について>

- 保育者として、危険な遊びとそうでない遊びの境目に注目する意識が根付いてきた。今回の遠隔地では、一步引いて、ある程度見守りに徹することができたと思う。こうしたことも子供の自由な姿を引き出すことにつながったのかもしれない。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.1. 南千住七丁目保育園

最終同行時の活動

- 最終活動は初回活動と同様、これまでも日常的に活用している天王公園で実施。今回はアドバイザーからは特段レクチャーなどせず、すべて保育者主導で行った。
- 保育者から特にアクティビティ等は用意せず、子供たちには自由に遊んで良い旨を説明。
- なお、前日に子供たちに対し、公園で遊ぶ際に必要なものを家庭から持って来て良いと伝えていたため、子供たちは自分が遊びたいことをイメージし、必要だと思うものを持ってきていた。

公園到着後、活動開始までの様子

- 公園に到着してすぐに、保育者の活動開始の合図があると子供たちは一斉に好きな場所へ散り散りになって駆けていった。
- 以前は遊具で遊ぶ子供が多かったが、この日は遊具に触れる子供はほとんどいなかった。

各々が自由に好きな場所へ向かう様子



子供の自然の感じ方と保育者の受け止めの様子

- 子供たちの自然の感じ方にも変化。自然物について香りなどにも関心を示すようになり、保育者にそうした発見を教える姿がみられた。
- 保育者としても、そうした子供の行動を見逃さず、発言を受け入れ共感するシーンも多くみられた。保育者の緊張感も、初回と比較して和らいでいるようであった。



←
果実の香りに関心を寄せる様子



→
変わった形・色をした木の実を発見

2. 参加園でのモデル事業実施

2.1. 南千住七丁目保育園

自然物を活用して遊ぶ様子

- 棒や石、草などを見つけて拾うだけでなく、それらをまた違う目的に活用して遊ぶ場面も。この日は、枝や草を釣り竿に見立ててザリガニを釣りを試みていた。
- 前日が雨だったこともあり、水たまりが発生していたところ、これを使って水に入って遊ぶ子供もみられた。事前に水で遊ぶことを想定し、替えの靴下などを準備してきた子供もいた。



← 釣り竿を作り、ザリガニ釣りを楽しむ様子

→ 水たまりで遊ぶ様子



身体を使いチャレンジする様子

- 岩登りやジャンプにチャレンジする子供も多かった。
- 以前はそもそもチャレンジしなかったり、明らかに危険な様子でチャレンジしようとしたりする子供が大半だったが、今回の活動の中では慎重に手足を使いながら、他方で積極的にチャレンジしていた。

岩と岩との間をジャンプする様子



最終同行後の保育者の主な意見

<子供たちの変化について>

- ある一つの遊びの中で、目的を達成するため、背が高かったり、力が強かったり、それぞれの特徴を持った子供が周囲に求められてチャレンジする場面があった。それぞれの子供が色々な力を発揮する機会になったと思う。
- プログラムの終盤の活動の際、「今日は木が暖かった」という発言をする子供がいたことには驚いた。全体として、表現力が高くなった気がする。
- あまり集団活動が得意でなく、はしゃぎすぎてしまう子が、グループの中心となって遊びを引っ張る様子がみられ、環境により色々な力が発揮されるのだと感動した。

<保育者自身の変化について>

- 見守りに徹することで、ここまで子供たちの変化を促すことができるというのは、大きな発見だった。
- リスクに関しては、かなりの部分で先入観であったことを理解した。ポイントを押さえれば必要な対応は意外と少ないことが分かった。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.1. 南千住七丁目保育園

モデル事業を踏まえた整理

- 本モデル事業を通じた子供たちおよび保育者の変化について、アドバイザーを交えてディスカッションを実施するとともに、保育者向けの事後アンケートを実施。
- 以下のような意見があった。

子供たちの変化について

- これまでは、目に入ったもので一人で遊ぶことしかしなかった子供が、周囲を巻きこんで、複数で遊べる遊びをするようになった。視野が広がり、より楽しい遊び方を自分の頭で考えることができているように感じた。
- 子供たちが、ふとした変化に気づくことができるようになったことには、衝撃を受けた。以前は木や葉にはまったく関心を寄せなかったのに、あるとき園庭で、「落ち葉がたくさん増えて、木にある葉っぱの数がとても少なくなったね」と言った子供がいた。

保育者の変化について

- 最も大きな変化は、「危険だと思っていた行動や物体は、場合によってはただの先入観だった」ということもあることを理解できたこと。例えば高いところで遊んでいたとしても、少し自然に慣れてくれば、そして保育者も事故になる手前のところでフォローしていれば、その行動自体を制限する必要はないことが分かった。むしろ、将来的には子供のリスク管理能力を伸ばすことができることが分かった。
- 自分としても楽しく活動できるようになった。多くの管理が不要だったことが分かり、その点での負担がなくなったからかもしれない。「見守る」ことの重要性が理解できた。

モデル事業実施前後のイメージギャップについて

- 自然を活用することが注目されていることは知っていたが、一体どんな効果があるのか、どう実践すればいいのかが分かっていなかったし、やるとしても壮大なことだと思っていた。実際にやってみると、そんなに仰々しいことではなく、都会でも十分取り組めることが理解できた。
- 当初、担当保育者として一体何をすればいいのか、どんな良いことがあるのか、など良く分からなかったが、一言でいうと「保育者側の意識改革」だったと思う。機会を提供することで子供の力を飛躍的に成長させることができたと感じているし、保育者としても非常に良い取組ではないか。

- 本モデル事業の最後に保護者に対してもアンケートを実施。次のような意見があった。
 - ✓ いつも自然の中での活動の話をととても嬉しそうにしてくれた。本人にとっても良い経験だったのではないか。
 - ✓ 自分の言葉で情景などを分かりやすく説明できるようになった。今後は四季の変化などの要素も活動に取り入れたりして、ぜひ続けてほしい。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.1. 南千住七丁目保育園

事業アドバイザーからのコメント



new education LittleTree
野村直子氏

取組の特徴と意図

- 導入に際しリスクへの懸念や不安が強く、どのように進めたら良いかも分からない様子だったため、初回の活動は、リスク管理の視点を伝えることも含め、アドバイザーが自然遊びのプログラムを行うこととした。
- 自然を活用する保育を難しく捉えている様子だったため、何か一定の成果・結果（制作物など）を必要としない、子供たちの自由な発想が生まれ、それを尊重する活動を体験してもらった。子供自身が感じ、考え、自分の意見や希望を発言できる雰囲気を作り、自ら選択することを促す活動を意図した。
- はじめは、保育者にはある程度心に余裕を持って子供たちの様子を見ることができるよう、小グループにて活動を行った。遠隔地では同行する職員で連携し、全体を捉えながら行う安全管理を実践した。実践を通して、リスクの共有やリスク管理の方法も都度伝えた。
- 保育者には子供と一緒に自然を感じ楽しむことを伝え、リラックスして子供たちを見守ることで視野が広がる体験を意図した。

実施中にみられた変化・効果

- 保育者と子供たち、子供同士のやりとりに変化が生まれた。子供たちの意見が活発に交わされるようになった。
- リーダーシップを発揮する子供、指示を出す子供、アイデアを出す子供・・・など、一つの目的に向かって、子供たちがお互いの個性を自然と生かそうとする姿や自分の役割を見つける場面が、遠隔地の活動以降にみられた。5歳児クラスの後期だったからこそ、普段の保育の集大成が自然の中での活動を通して生まれたと推測する。
- 保育者自身のリスクに対する認識が漠然とした事から具体的な対策へと変化し、それに伴い余裕を持って自然の中での活動ができるようになった。結果、保育者の笑顔や静かな声かけなど本来の良さがに現れてきた。

考察・さらなる活動に向けて

- 保育者が子供の力を信じ、その姿に感動できるような活動を意図した結果、最終回で子供の力が最大限に引き出された活動が生まれた。
- どこまで子供の自由な発想を尊重するかが今後の課題となるだろう。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.2. せせらぎ保育園

基本情報

所在地	・ 清瀬市中里
運営主体・種類	・ 社会福祉法人、認可保育所
施設の規模 (年齢別人数)	0歳:15、1歳:18、2歳:20 3歳:22、4歳:22、5歳以上:23 計120人
周囲の自然環境	・ 清瀬市は、多摩地域北東部に位置する。 ・ 徒歩圏内に、蛍の幼虫を生育している公園や、子供たちが入って遊ぶことの出来る川（柳瀬川）があるなど、自然環境は豊か。
事業開始前の自然を活用した保育の取組状況	・ 自然環境は豊かであり、蛍の観察や河原での遊び等に取り組んでいる。 ・ 一方で、日常的な屋外での遊びは園庭が中心であり、周囲の環境を更に活用する余地がある。

園の周辺環境

- 園庭の真ん中には木製の小屋のような形の遊具、滑り台がある。また、円形の子供たちが走り回れるスペースがあり、シャベルやバケツなど、子供たちが遊べる道具も用意されている。
- また、園庭にはさまざまな高さの樹木を植えているほか、園の入り口のすぐ脇で亀を飼育している。
- 徒歩20分圏内に、蛍の幼虫を生育している公園があり、季節によっては蛍の観察が可能。
- 徒歩圏内に、子供たちが入って遊ぶことの出来る川（柳瀬川）があり、河原でさまざまな動植物に触れることも可能。

園庭の様子



園の外観



2. 参加園でのモデル事業実施

2.2. せせらぎ保育園

モデル事業の実施概要

- モデル事業は、以下のスケジュール・内容で実施。

日程	実施事項	内容
2019/11/8	事前打合せ	<ul style="list-style-type: none">・ 菅原園長、アドバイザー、東京都、事務局が参加し初回打合せを実施。・ 園としての考え方等をうかがい、取組方針を決定。
2019/11/21	導入研修	<ul style="list-style-type: none">・ 園の保育者を対象にアドバイザーが自然を活用した保育に関する導入研修を実施。・ グループディスカッション等を通じて、事業への不安や、事業を通して取り組みたいことなどを整理。
2019/12/5,6,11	日常活動への同行（初回）	<ul style="list-style-type: none">・ アドバイザーが、3つの異年齢グループの日常活動へ同行。・ 朝の会から戸外活動まで同行し、その後保育者との振り返りを実施。
2020/1/14	遠隔地プログラムの実施	<ul style="list-style-type: none">・ 野山北・六道山公園にて遠隔地プログラムを実施。
2020/1/20	日常活動への同行（最終）と振り返り	<ul style="list-style-type: none">・ 初回、日常活動へ同行した3グループのうち、1グループを選定し、アドバイザーが活動へ同行。・ 終了後、保育者全体と振り返りを実施。

事前打合せ・事前アンケート

- 事前打合せでは、園の方針として、「子供発信の保育」（子供たちの主体性・自主性を大事にした保育）を大切にしていることを確認。
- 周囲の豊かな自然環境を活かし、日常の保育の中で、自然を活用した活動を行うことで、保育者や子供の経験の幅が広がるよう取り組んでいくことで合意した。
- せせらぎ保育園では異年齢保育を取り入れており、週4日、3歳～5歳児からなる3つの異年齢グループで過ごしている。そのため事前アンケートでは、さまざまな発達段階の子供たちが自然の中で活動することに対する不安や懸念がみられた。

事前アンケートでの主な意見

<自然を活用することへの期待>

- ・ 自然が減ってきている中で、目の前にあるもの（木・葉など）を使ってどのような楽しみ方が出来るのかを知りたい。

<モデル事業参加に際しての不安や懸念>

- ・ 子供一人ひとりの安全管理や保護者理解が不安。
- ・ 縦割り保育だと発達がさまざまなので、遊び方の難しさがある。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.2. せせらぎ保育園

導入研修の実施

- 自然を活用した保育を推進するにあたっての、事前研修を実施。
- アドバイザーからの講義として、自然を活用した保育を実施する際のポイントや事例等について紹介。さらに、保育者自身がコツをつかむためのミニアクティビティを実施。
- 研修の最後には、グループワークとして、保育者自身が自然を活用した保育を実施するにあたって感じている不安や期待、やってみたい活動などを打合せ、発表した。

項目	内容
導入講義前半 (20分)	自然を活用した保育のポイントや事例等について解説
ミニアクティビティ (15分)	自然を活用した保育のポイントを実際に保育者が体験
導入講義後半 (25分)	安全管理について、質疑応答
グループワーク、発表 (55分)	自然を活用した保育を行うにあたっての不安、やってみたい自然を活用した活動などについて打合せ、グループで出した意見を発表



ワークショップでの主な意見

<今後やってみたい活動（グループワークの発表から）>

- お弁当を持参して、時間を気にせず外で思いっきり遊ぶ活動。
- 子供たちが生き物と自由に触れ合える活動。
- 秘密基地づくりなど、子供たちが自由に発想して取り組める活動。

<導入研修を通じて感じたこと>

- 自然の中で活動してアレルギー等が出ないかなど、安全管理面が気になっていたが、事前にリスクとなりそうなものを確認し、子供たちに伝えておけば、過剰に締め付ける必要はないと分かった。
- 一見実現が難しそうに見えても、保育者同士が協力すれば「やってみたいこと」の多くは実現できそうであると感じた。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.2. せせらぎ保育園

初回活動の実施

- 初回活動は園から徒歩15分程度の距離にある雑木林にて実施。特別なアクティビティ等は実施せず、子供たちが決められた範囲内で自由に遊ぶ形とした。
- また、これまでの活動では棒を使った遊びを原則禁止としていたが、事前に棒遊びに関するルールを伝えることで棒遊びを導入した。活動の中で、棒遊びをする子供たちへの声かけについて、保育者がアドバイザーにアドバイスを求める場面もみられた。

雑木林までの道中の子供たちの様子

- 雑木林に向かう道中、子供たちから、「雲がサメに見える」という発言があり、盛り上がった。
- 日ごろから空や雲などに関心を持っている子供が多い。



雑木林での子供たちの様子

- 雑木林は一定の広さがあるが、最初は入り口付近に固まって遊ぶ様子がみられた。
- 雑木林での遊びに慣れてくると、棒や丸太を使った家づくりなどの活動がみられるようになった。



活動の振り返りの実施

- 活動後、保育者とアドバイザーにて振り返りを実施。
- 棒を使った遊びや、自然の中での遊び方について、以下のような意見があった。

振り返りでの主な意見

<棒を使った遊びについて>

- ・ 今回初めて棒を使った遊びを解禁したこともあり、見ていて危ないと感じるシーンもあったが、「振り回さない」「棒で遊ぶときは広いところで遊ぶ」など、事前に子供たちと確認したルールについて繰り返し確認することで、安全管理が出来ることが分かった。

<自然の中での遊び方について>

- ・ 保育者自身も多様な自然経験があるわけではないため、自然の中での遊び方に戸惑うこともあった。遊びの幅を広げるために、保育者自身も経験を積んでいきたい。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.2. せせらぎ保育園

遠隔地活動の実施

- せせらぎ保育園は、近隣の自然環境に恵まれていることから、より豊かな自然環境のもとで活動できるよう、武蔵村山市の野山北・六道山公園で遠隔地活動を実施。
- 4台のマクロバスで公園へ向かい、午前は5歳児と3・4歳児に分かれて活動。お昼ご飯の後は、3～5歳児が一緒になって活動した。
- 当日のタイムテーブルは以下の通り。

- 8：30～ せせらぎ保育園からマイクロバス4台に分かれ、出発
- 9：30～ 野山北・六道山公園到着
- 9：45～ 5歳児と3・4歳児の2手に分かれ、午前の遊び
- 12：00～ 全員で田んぼの周りでお昼ごはん
- 12：30～ 田んぼの周りで午後の遊び
- 13：30～ 公園出発
- 14：30 園へ帰着



←
公園の山側斜面
での様子

田んぼとあぜ道を
駆け回る様子
↓



豊かな自然環境ならではの遊びを楽しむ様子

- 落ち葉を大きく舞わせる、落ち葉に飛び込む、友達を埋める、などの落ち葉を使った遊びをはじめとする、豊かな自然環境ならではの遊びを楽しむ姿がみられた。
- 午後には田んぼとあぜ道で自由に走り回り、どろどろになりながら自由に遊ぶ様子がみられた。

落ち葉で遊ぶ様子



2. 参加園でのモデル事業実施

2.2. せせらぎ保育園

普段とは違うことにチャレンジする様子

- 普段は保育者の後ろをついて歩くことの多い子が、自ら率先して動き、公園の環境を探索する姿がみられた。特に3歳児について、普段よりも積極的な姿が顕著であった。
- さらに、細いところを渡る、沢をジャンプで飛び越えるなど、身体能力的な点でもチャレンジしている様子がみられた。

細いところを渡る様子



沢をジャンプで飛び越える様子



感性的な体験の様子

- 身体を動かすことだけでなく、ススキの穂の振り方によって、綿の舞い方が違うことを発見して夢中になるなど、感性的な体験・発見をしている姿もみられた。



夢中でススキの穂を振っている様子

活動の振り返りの実施

- 活動後、保育者とアドバイザーにて振り返りを実施。以下のような意見があった。

振り返りでの主な意見

<活動前に保育者が想定していた子供たちの姿と、実際の姿のギャップについて>

- 想像以上に子供たちがひとところに留まらず、自由に動き回る様子に驚いた。
- 3歳児を中心に、普段よりも積極的に行動する姿がみられた。普段は先生の後ろをついて歩くことの多い子が、公園の端の方まで走って行って散策していた。
- フィールドの解放感の影響か、服が汚れるのを嫌う傾向にある子が、田んぼやあぜ道でどろどろになって遊んでいる姿がみられた。

<活動前の準備について>

- 事前に子供たちと一緒に公園のパンフレットを見て、「どの生き物に出会えるかな？」と話していたため、当日は生き物を探そうとする姿が多くみられた。
- 実際は季節柄、生き物はほとんどいなかったが、自然に興味を持って、積極的に行動するきっかけの一つになったのではないかと感じた。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.2. せせらぎ保育園

最終同行時の活動

- 最終活動は初回活動と同様、園から徒歩15分程度の距離にある雑木林にて実施。特別なアクティビティ等は実施せず、子供たちが決められた範囲内で自由に遊ぶ形とした。
- 初回活動から何度かアドバイザーの同行がない日もこの雑木林へ通っており、初回活動時からの変化を見て取ることが出来た。

雑木林までの道中の子供たちの様子

- 雑木林に向かう道中、子供たちが畑の土に霜柱がおりていること、アスファルトの水溜りが凍っていることを発見。
- 車通りも多少ある道路だったが、保育者の安全管理のもと立ち止まり、氷を観察した。

霜柱を手に取る様子



雑木林での子供たちの様子

- 初回活動時は不慣れであったこともあり、雑木林の入り口付近に固まって遊ぶ傾向にあった。しかし、最終活動時は、棒の遊び方についてのルール確認が終わると同時に子供たちが一斉に雑木林へ散っていく様子がみられた。

棒を使った遊びについて

- 初回活動時に棒を使った遊びを解禁して以降、遊ぶ前に棒を使った遊びのルールを確認し、あとは自由に遊ばせることを継続してきた。
- その結果、最終同行時には、保育者がルールを説明しようとする、子供たち側から先回りしてルールを確認しようとしており、ルールが浸透してきたことがうかがえた。
- 加えて、棒を使った遊び方の幅も広がっており、シャベルの代わりに木の棒で地面を掘り起こそうとする姿などもみられた。

棒を使った遊びのルールを確認する様子



木の棒で穴を掘る子供たち



2. 参加園でのモデル事業実施

2.2. せせらぎ保育園

子供たち同士の遊びの様子

- ▶ 子供たちだけで会話をしながら家づくりをしたり、子供同士で協力して丸太を運ぶなど、互いに力を合わせる場面が自然と出てきていた。
- ▶ 普段マイペースな子が、大きな丸太を友達と協力して運ぶ姿に保育者が驚く場面もあった。

二人で丸太を運ぶ様子



子供たちと保育者による活動の振り返り

- ▶ 活動後、保育者と子供たちが車座になって振り返りを実施。
- ▶ 一人の子供の発言に、同じ遊びをしていた何人かが共感する場面や、保育者自身の「楽しかった」というコメントに、子供たち側が共感する場面などがみられた。

子供たちとの振り返りの様子



保育者による活動の振り返りとドキュメンテーション

- ▶ 活動後、保育者とアドバイザーにて振り返りを実施。
- ▶ また、活動のまとめとして、保育者でドキュメンテーションを作成し、保護者に向けて発信した。

保育者による活動の様子の発信



最終同行後の保育者の主な意見

<子供たちの変化について>

- 最初は自然の中でどのように遊んだら良いのか分からず、戸惑いも感じていた子供も、徐々に自然に慣れてきて、さまざまな発想で楽しめるようになった。
- 一つのことに集中して「遊び込んでいる」様子や、子供たち同士で声掛けしあって協力している様子などが自然とみられるようになった。

<保育者自身の変化について>

- 子供は遊びのきっかけさえ掴むことができれば、あとは子供たち同士で工夫したり、協力したりして遊ぶことが分かった。
- 子供たち同士で遊び始めたら敢えて少し距離を取って見守ることが出来るようになり、結果視野が広がったと感じる。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.2. せせらぎ保育園

モデル事業を踏まえた整理

- 本モデル事業を通じた子供たちおよび保育者の変化について、アドバイザーを交えてディスカッションを実施するとともに、保育者向けの事後アンケートを実施。
- 以下のような意見があった。

日常活動を通じた子供たちの変化について

- ・ 最初は雑木林での遊び方が分からず、自然の素材を上手く遊びに使えていなかったが、繰り返し雑木林へ行って「遊び込む」ことで、自然の中での遊びに慣れてきた。
- ・ 子供たちが自然に協力したり、自然の素材で工夫したりする姿がみられた。
- ・ 雑木林は子供たちの興味を引くものにあふれているためか、「帰りたい」「おなかですいた」といった発言がほとんどなくなった。

遠隔地活動を通じた子供たちの変化について

- ・ 開放感のある環境のもと、特に3歳児が、自分から暗いところに足を踏み入れてみる、遠くまで散策してみるなど、チャレンジしている姿がみられて良かった。
- ・ 遠隔地プログラムの後、室内遊びが好きだった子が、自分から外遊びを選択していて驚いたことがある。直接の効果かどうかは分からないが、外で遊ぶ楽しみを見つけたのであれば嬉しい。

本事業全体を通じた保育者の変化について

- ・ 部屋の中では、おもちゃや遊具の取り合いで喧嘩が起きてしまうところを、自然の中では「それ僕もほしい」となると、「あっちを一緒に探そう！」という発話が自然と生まれるため、喧嘩が起こりにくいことが分かった。本来的には遊具やおもちゃがない環境での遊びが向いている子供たちなのだと思うので、今後もっと外で自由に遊ばせたい。
- ・ 自然の中、という環境は、どちらかと言えば危険が多いイメージがあったが、子供たちのチャレンジに対して「良いよ」「やってごらん」と言いやすい環境だと分かった。
- ・ 安全管理はやはり必要なので、子供たちの「やりたい」を出来るだけかなえつつ、最終ラインをどこにするかについて、もっと保育者同士で話し合う必要があると感じた。
- ・ 子供は遊びのきっかけさえ掴むことができれば、あとは子供たち同士で工夫したり、協力したりして遊ぶことが分かった。子供たち同士で遊び始めたら敢えて少し距離を取って見守ることが出来るようになり、結果視野が広がったと感じる。

- 本モデル事業の最後に保護者に対してもアンケートを実施。次のような意見があった。
 - ✓ 遠隔地プログラム当日はいつもより沢山園であったことの話をしてくれた。
 - ✓ 「あれは何？」「なぜ？」と身の回りのことに関心を持つことが増えた。
 - ✓ 自然を活用した取組は今後も継続してほしい。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.2. せせらぎ保育園

事業アドバイザーからのコメント



new education LittleTree
野村直子氏

取組の特徴と意図

- “子供発信の保育”に取り組み始め、試行錯誤しながら保育を行う中で具体的な懸念事項や疑問が生まれているところでの今回の事業実施となった。“子供発信”の保育と“子供次第”の保育の違いを保育者自身が考えながら見出していくことを意図した。
- 保育同行の中で気づいたことをアドバイスする方法を取った。幼児の縦割りグループでの活動を実践しており、縦割りならではの懸念もあった。自然の中で年齢期による動きの違いやリスク管理の視点を伝え、漠然とした不安を払拭することを意図した。
- 保育者は“どうやるか”（手法）が分からないとのことだったため、保育者自身も体験することと、ディスカッションを通し“どうだったら可能か？”という思考へと促すことを意図した。

実施中にみられた変化・効果

- 各縦割りグループによってグループの特徴や子供たちの姿が違い、保育者のあり方が保育に現れていたため、遠隔地での保育者が連携しながら子供たちの姿をみることで、子供にとってはグループを超えた保育者との関わりが生まれ、保育者同士ではお互いの視点や捉え方などが共有する機会となったのではないかと。
- 遠隔地や自然の中での活動では、チャレンジをする姿や普段とは違う子供たちの姿（e.g. 普段活動的でない子が木登りをしていた、一人遊びに没頭するタイプの子が手助けをする等）が多くみられた。
- 3歳児の成長の変化が大きくみられた。保育者も想定を上回った成長に喜び、この時期（年度後半）だったことを加味しても大きな変化だった。
- 比較的保育歴の少ない保育者が、自然の中での活動で生き生きとし、保育者自身の多くの気づきにより、子供への声かけや視点が変わった。

考察・さらなる活動に向けて

- “子供発信の保育”に取り組んでいたため、自然環境では子供発信を取り込みやすく、保育のヒントとなったようだ。
- まだ保育者によって保育や考え方にばらつきもあるようなので、園として何を大切にしていくかの意見交換を重ねることで相乗効果が見込まれる。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.3. まちの保育園小竹向原

基本情報

所在地	練馬区小竹町
運営主体・種類	株式会社、認可保育所
施設の規模 (年齢別人数)	0歳:6、1歳:12、2歳:14、3歳:16、4歳:16、5歳以上:16 計80人
周囲の自然環境	<ul style="list-style-type: none">練馬区の住宅地の中の保育園。近くには、住宅地の公園のほか、プレイパークや大きめの広場のある自然豊かな公園（城北公園、柿の木広場）がある。
事業開始前の自然を活用した保育の取組状況	<ul style="list-style-type: none">子供の主体性を重視した保育を実践している。毎日遊ぶ園庭には、固定遊具はなく、木登りできる樹木、築山があり自然素材を活用する工夫をしている。週1度程度、公園に散歩に出かけ自然環境を活用して遊んでいる。外で拾ってきた自然素材を元に制作を行うなど、園外での遊びと、園内での遊びが結びつくような工夫をしている。

園の周辺環境

- 250㎡の園庭には固定遊具は少なく、木登りできる樹木、木に縛ったロープや埋め込んだ丸太、流木、築山にマットや道具、自然素材等を組み合わせている。
- 近くには、徒歩10分ほどで、土を掘ったり、自然素材、道具を組み合わせて遊ぶことができる区立のプレイパーク（こどもの森、3,000㎡）がある。
- 徒歩15分ほどで、386,000㎡の敷地の自然公園（城北中央公園）があり、競技場、野球場、多目的広場などの運動施設の他、児童公園や広場などがある。



保育園内の様子



園庭



城北中央公園内の
柿の木広場



2. 参加園でのモデル事業実施

2.3. まちの保育園小竹向原

モデル事業の実施概要

- モデル事業は、以下のスケジュール・内容で実施。

日程	実施事項	内容
2019/11/11	事前打合せ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 園長、コミュニティコーディネーター、保育者数名にて初回打合せ。園での取組実態や、プログラムに対する思い・不安事項等を共有。 ・ 園内の案内および、園周辺の環境の確認。
2019/11/22	導入研修	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保育者を対象に自然を活用した保育の導入研修を実施。 ・ グループディスカッション等を通じて、自然を活用した保育を通して取り組みたいことなどを整理。
2019/12/3	日常活動への同行	<ul style="list-style-type: none"> ・ 園周辺の公園（徒歩15分、柿の木広場）での活動に同行。 ・ 帰園後、保育者との振り返りを実施。
2019/12/13	遠隔地プログラムの実施	<ul style="list-style-type: none"> ・ 光が丘公園にて遠隔地プログラムを実施。 ・ 帰園後、保育者との振り返りを実施。
2020/1/15	日常活動への同行（最終）と振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ※最終同行は雨天のため中止。園内活動を見学。 ・ 保育者と振り返りを実施。

事前打合せ・事前アンケート

- 事前打合せでは、すでに試行錯誤しながら自然を活用した保育に取り組んでおり、本モデル事業へ参加することで、これまでの取組の方向性を振り返る機会にしたい意向を確認。
- すでに実践されていることもあり、自然を活用した保育のイメージが具体的であり、事前アンケートでは、事業への不安について半数程度が「特に懸念はない」と回答した。

事前アンケートでの主な意見

<自然を活用することへの期待>

- ・ 自然の中には多くの学び（形、色、不思議さ等）があり、それに触れることで感受性を育みたい。自然の不思議さ、魅力に気づいてほしい。
- ・ 他者と協働する力・子供が考える力・しなやかさを身に付けることを期待する。

<モデル事業参加に際しての不安や懸念>

- ※半数程度が「特に懸念はない」と回答。
- ・ 子供の安全を守るためには手や目が必要。
 - ・ 保育者の準備や振り返りの時間の確保が大変。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.3. まちの保育園小竹向原

導入研修の実施

- 事前打合せや事前アンケートを踏まえ、保育者の自然活用への期待・目的を明確化するために主にグループワークに比重をおいて実施。
- 自然を活用した保育について、導入講義を行った後、「自然を通して子供たちに体験してもらいたいこと」について、4名×2グループでグループワークを行った。
- 日ごろから保育者同士でのディスカッションを行っているため、非常に活発な議論で、スムーズにアイデア出しを行っていた。「どのような遊びをさせるか」といった活動ではなく、「何を感じてもらいたいか」という感性的な内容が多くみられたことが特徴的であった。

項目	内容
アイスブレイク（15分）	保育者の子供の頃の自然体験の共有 保育をする上で大切にしていることの共有
導入講義（30分）	自然を活用した保育のポイントや事例等について解説
グループワーク（60分）	自然を活用した保育で具体的に実践したいことについて打合せ
まとめ（15分）	今後の取組について



ワークショップでの主な意見

<自然を活用して今後やってみたい活動（グループワークの発表から）>

- 五感を使って自然をたのしんでもらいたい（風を感じたり、花や土の匂いを感じたり、陽の暖かさを、日陰の冷たさを感じてもらいたい）。

<導入研修を通じて感じたこと>

- 講義を通して、自然を活用した保育の大切さを改めて整理、理解することができた。
- グループワークを通して、これまで実践してきた園での取組を改めて振り返ることができ、可視化されたことが非常に良かった。
- より良い活動にするために、この事業を積極的に活用したい。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.3. まちの保育園小竹向原

初回活動の実施

- 初回活動はこれまでも何度か遊びに出かけたことのある柿の木広場で実施。9:30に園を出発し、幹線道路・歩道橋がある道を15分程度歩いて到着。
- 普段通りの活動を行ってもらい、公園での活動中の事業アドバイザーの関与は最小限とした。アクティビティの提供など特段のサポートはせず、保育者の声かけの意図などを振り返り時に共有してもらった。

公園到着から遊び開始までの様子

- 公園に到着後、保育者が立ち入り禁止等の注意事項を10数秒ほど行った後、「行ってらっしゃい～」と遊びに送り出した。
- 子供たちは、解散直後から一斉に個々に散らばり、自分の好きな遊びに入り込んでいった。

公園到着後の様子



子供たちが自由に遊びを見つけて遊ぶ様子

- いつも遊んでいる公園で、安心して子供たちが自由に遊びに没頭する様子がみられた。
- 保育者は子供たちが各々遊ぶ様子を見守りながら、適宜声かけを行っていた。



↑ 切り株を使って
おままごとをする様子

← 大きな木をみんなで
運んでいる様子

2. 参加園でのモデル事業実施

2.3. まちの保育園小竹向原

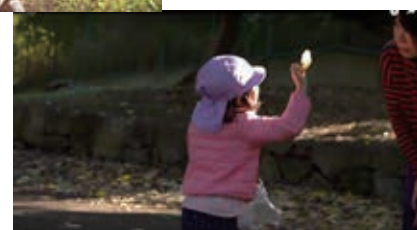
子供たちが自然を五感で感じる様子

- 葉っぱの色や、小枝の音、公園に降り注ぐ太陽の明るさなど、子供たち自身が、自然を五感で感じている様子が多くみられた。



←枝で石を叩く音を感じる様子

黄色の葉っぱを見つけた様子→



子供たちの発見に寄り添う保育者の様子

- 子供たちが感じた自然を、ともに感じ、子供たちが気付いたこと、面白いと思ったことに寄り添い、時には子供たちの行動に対して問いかけるような声かけをする保育者の姿がみられた。



←子供が見つけた松ぼっくりを見上げる様子

- つぼみに関心を持っている様子→
(つぼみをたくさん取ってしまう行動が変わることを期待し、つぼみが花になることを一緒に発見するなど、試行錯誤しながら声かけをする保育者の姿があった)



活動の振り返りの実施

- 活動後、保育者とアドバイザーにて振り返りを実施。
- 改めて振り返ることで、自身の子供への関わり方や自然の良さを再認識することができたといった意見が多かった。具体的には以下のような感想があった。

振り返りでの主な意見

<子供への保育者の関わりについて>

- いつも通りの活動であった。常に子供を一人の人として尊重し、子供を見守り、子供がどんなことを面白がっているのか、気が付いているのかを感じ取り、寄り添うことを大事にしている。
- 子供たちの遊びの幅が広いということ、振り返りを通じて改めて知ることができ、これまでの保育に対して自信が持てた。

<子供たちの様子について>

- 豊かな自然の中で、子供たちの何気ない気づき・疑問が多くみられた。(例えば、太陽が降り注ぐ公園を見て「今日はこの公園すごく明るいね」という発言や、「つぼみを植えたらどうなるのだろう」「花が咲くかもよ」といった発言があった。)

2. 参加園でのモデル事業実施

2.3. まちの保育園小竹向原

遠隔地活動

- 遠隔地活動場所として、日ごろの活動場所より広く、自然豊かであり、また移動時間の負担を考慮し、練馬区の光が丘公園で実施。
- 普段の生活の一部として実施したいという園の意向に沿い、移動は電車を利用。
- 現地では、いつも通り、自由に遊んだ。
- 当日のタイムテーブルは以下の通り。

光が丘公園の様子



- 9:00～ まちの保育園小竹向原を出発
- 10:00～ 電車を乗り継ぎ、光が丘公園に到着
広場で自由遊び
- 11:00～ 昼食
- 11:30～ 食べ終わった子供から広場で自由遊び
- 11:45～ 光が丘公園を出発
- 12:30 電車を乗り継ぎ、まちの保育園小竹向原に帰着

豊かな自然環境ならではの遊びを楽しむ様子

- 公園到着後、普段よりも開放感のある自然の中で、落ち葉かけをしたり、大きな坂や起伏の激しい場所を走り抜けるなど、いつも以上にダイナミックに遊ぶ様子がみられた。
- はじめは、保育者の見える範囲を意識しながら遊んでいたが、徐々に冒険心も出てきて、活動範囲が広がっていく様子がみられた。

落ち葉を掛け合う様子



2. 参加園でのモデル事業実施

2.3. まちの保育園小竹向原

普段との共通点・相違点を感じる様子

- いつもと違う場所で子供たちはさまざまな発見をする。葉っぱの色・形、実が普段の公園にあるものと同じこと、違うことなど、小さな気づきに心が躍っている様子が多くみられた。

子供に寄り添う保育者の姿

- 思いっきり走り回る子供もいれば、一人でじっくり楽しむ子供もいる。一人ひとりの子供の気持ちに静かに寄り添う保育者の姿がみられた。

落ち葉を楽しむ子供に寄り添う保育者の様子



子供同士で協力する様子

- 雄大な自然を前に、一人でできないことでもみんなで協力して成し遂げようと試行錯誤する子供の様子が頻繁にみられた。

丸太をみんなで転がす様子



普段と異なる友達との関わり

- 普段と異なる場所でさまざまな遊びが生まれる中、普段関わっていなかった子供同士が仲良く遊ぶ姿もみられた。

普段とは異なる友達と落ち葉を使って遊ぶ様子



活動の振り返りの実施

- 活動後、保育者とアドバイザーにて振り返りを実施。以下のような意見があった。

振り返りでの主な意見

<子供たちの様子について>

- 普段はできないようなダイナミックな遊びができたのは非常に良い経験になった。
- 異クラスが混ざって遊ぶ様子も見受けられ、普段関わりのない子供同士でも繋がりが広がっていると感じた。
- 普段の公園と比較して、違いを感じている子供の様子もみることができて良かった。

<保育者の関わりについて>

- はじめは、広い場所に一齐に散らばっていったら大丈夫かと思ったが、意外と子供たちは、大人の見える範囲で遊んでいた。また、電車移動も皆、階段の上り下りなど長距離歩いていて大変驚いた。より一層子供のことを信頼していこうと反省した。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.3. まちの保育園小竹向原

番外編：園内での活動（※雨天のため屋外活動中止）

- 最終同行予定日は雨天のため屋外活動を中止。
- 下記に園内での特徴的な活動をいくつか紹介する。

園内での活動の様子

- まちの保育園小竹向原では、園内での活動と園外の活動の連続性を大事にして保育を実施している。
- 当日は、子供たちの発案により、雨水をコップに集めて、紙を溶かして遊ぶ様子や、粘土に色を付ける活動、光の色を楽しむ活動などがみられた。
- 園内には、自然の中で拾ってきたさまざまな素材を用いた展示や、遊び道具があった。

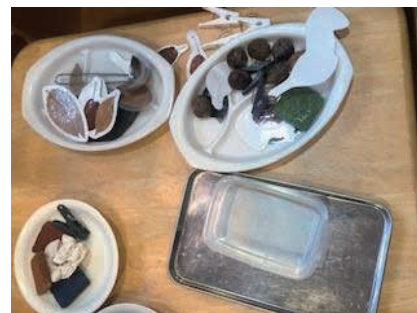
活動部屋には、拾ってきた自然素材を活用した作品を展示



雨水をコップに集めて紙を溶かして遊ぶ様子



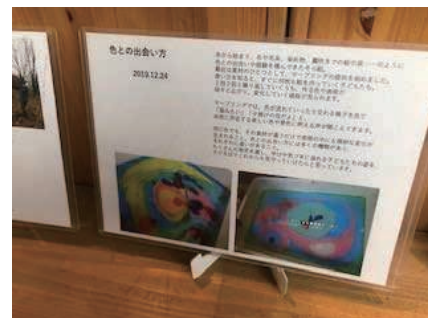
自然素材を活用した
おままごとセット



ドキュメンテーションの取組

- 保育者が、普段の保育の中で、「心が動いたとき」に作成しているドキュメンテーション。子供と関わる中で見つけた、子供の面白い言動や表情を記録し、子供たちや、保護者、他の保育者と共有している。
- ドキュメンテーションというアウトプットの間があることで、より、保育者自身の感性が磨かれる機会にもなっている。

ドキュメンテーションの例



2. 参加園でのモデル事業実施

2.3. まちの保育園小竹向原

モデル事業を踏まえた整理

- 本モデル事業を通じた子供たちおよび保育者の変化について、アドバイザーを交えてディスカッションを実施するとともに、保育者向けの事後アンケートを実施。
- 以下のような意見があった。

本事業での活動を通じた子供たちの様子について

- 本事業実施前から、よく近くの公園には遊びに行っていたため、近接地での遊びでは、到着後スムーズに各自の遊びに移行するなど、自由に遊ぶことに慣れている様子がみられた。
- また、遠隔地プログラムでは、普段よりも広大な環境で活動したことで、子供たちの遊びの幅が広がったり、普段との違いに気が付きそれを表現する様子がみられたり、新しい子供同士のつながりがみられたりした。
- 遠隔地プログラムの後は、自信が付いたのか、身支度が早くなったり、4歳児クラスの子供が3歳児クラスの子供に手を差し伸べる様子がみられるようになった。

本事業での活動を通じた保育者の様子について

- 遠隔地プログラムでは、電車での移動や、普段と異なる場での遊びを通して、保育者側としては難しいと思っていたことが、子供だけでできるという発見ができ、子供たちの可能性を改めて感じる機会となり、見方・接し方が変わった。

本事業全体を通しての感想について

- これまで試行錯誤しながら実施していたことの方角性を再確認できたことで、自信につながった。
- 自然を活用することは大事であるが、自然環境は場であり、その中で、いかに子供の主体性を大事にして関わることができるかが、重要であることを改めて感じた。
- 普段あまり意識をしていなかったが、改めて自然の良さを感じる機会となり、より自然活用の実践を深めようという意識が出てきた。
- 今後は、乳児等への活動の拡大を検討をしていきたい。また、さらなる自然素材の活用法も模索していきたいと思う。
- 毎回の振り返りを通じて、保育者が自身の子供への関わりを振り返ったり、子供の気づきを振り返ったりすることの重要性を感じた。

- 本モデル事業の最後に保護者に対してもアンケートを実施。次のような意見があった。
 - ✓ 遠隔地への遠足を通して、子供の自信が付き成長したように感じた。
 - ✓ 保育園で見つけたものの話などを積極的にする様子がみられるようになった。
 - ✓ 自然の中では、バラエティに富んだ遊びができておもしろい。継続的に今回のモデル事業のような取組があると良い。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.3. まちの保育園小竹向原

事業アドバイザーからのコメント



new education LittleTree
野村直子氏

取組の特徴と意図

- すでに保育の中に自然を取り込んでいる様子であったため、保育者自身が見えない課題があるのかどうかを見ていくこと、また保育者の子供との関わりやあり方を言語化していくことに努めて行った。
- 保育の妨げにならないように配慮して同行し、普段通りの子供と保育者の姿を見て言葉を拾い、保育のポイントとなるところを探った。
- 当園ならではの特徴を生かした自然を活用する保育の検討を行った。
- 普段より目指している保育のスタイルが、子供の姿を捉え、どんな体験になっているのか、子供の中に何が起きているのかを見て取る保育であるため、保育者の関わり意図を言語化することを意図した。

実施中にみられた変化・効果

- 保育者が自信を持って保育を行うことができるようになった。感覚的・抽象的な表現であった保育を研修や活動の振り返りなど言語化することで認識でき、具体的な場所や素材に気づくようになったとのことだった。
- 遠隔地は特別な活動にならないようにという配慮のもと、電車で移動を行ったが、結果的には電車が特別な活動となり、非日常の体験ということの効果も感じられた。
- 遠隔地ではいつもと違う子供の姿と成長がみられ、保育者の発見にも繋がった。また、人工物（シャボン玉が出ている場所があった）よりも自然で遊ぶことを優先する子供たちの姿もみられたことで、普段から人工的な遊具よりも創意工夫が生まれる素材の方に興味を持つ子供の姿に気づいた。遠隔地での活動の意義も感じられたのでは。
- 普段から取り組んでいるドキュメンテーションが、保育者の子供の姿を捉える視点を育てていることが実施中に見て取れた。

考察・さらなる活動に向けて

- 当園の取組により、自然を活用する方法ではなく保育者の姿勢やあり方を示すことができた。子供をどう捉えるかがポイントである。
- 目指す保育の方向性を統一しつつ、次は保育者の個性をどう出すか（個性は自然に出て、統一できない部分であると思うので）検討の余地があると感じた。そのことで保育者が自信を持って進めるのではないか。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.4. 3施設での活動を踏まえて

new education LittleTree

野村直子氏

モデル事業を通じての考察

実施に際しての考え方・配慮点

- シンプルに「子供主体の保育」を「自然を活用」して行う・という認識の元に実施した。そのため、「自然をどう活用するか」という方法論よりも「自然に対峙している時の子供の姿をどう捉えるか」を実践を通して伝えることを軸にした。
- 自然と対峙するには、自然を発見しなければ始まらない。子供も大人もそこにある自然に慣れ親しんでいなければ、発見する視点もないのが現状である。そのため、自然に気づくアクティビティなどで気づかせることから始めた。誰でも気づく力があり、子供の中で自然への気づきは日常的にたくさん生まれているはずである。保育者も一緒に発見することで、共感が生まれ「今、子供はどんな体験をしているか」に気づけると考え、保育者自身がどんな体験をしているかにも注意を払った。
- 子供に自由に感じて、考えて、行動してごらんとすると、タガが外れることが多々ある。今まで禁止されていたことを片っ端からやってみようとする。そのことでまた、“禁止事項”を与えるのではなく、そこから子供にどう考えさせるか？が大切だと考えている。“危険を排除する”よりも“危険なことを認識すること”の方が“生きる力”へと繋がる。その時、保育者が安全管理の視点（予知予測・対処）を持ち、危ないと思った時に咄嗟に止められるようにしておくことは大切である。
- 「自然を活用」する上では“体験”や“プロセス”がポイントであると考え、どんな体験かどんな気づきや成長を意図しているのかなどをディスカッションを通して保育者自身が気づいていくことを意図した。
- 三園三様だったため、比べるのではなくそれぞれの園ならではの取組になるよう配慮して行った。何か決まったやり方や正解はない。

さらなる活動の促進・展開のために

- 「自然の中での保育」と「自然を活用した保育」とでは捉え方や手法も変わってくるため、各園の周辺環境を検討し、どのように活用するかを一緒に考えていくという過程も必要であると考えます。
- 保育者自身の自然体験が必要であり、自然が身近になることで、自然を活用するアイデアも自然と出てくるだろう。
- 大人が考える“良い・悪い”の認識を変化させていくことが課題である。

3. 活動報告会の開催

3.1. 活動報告会概要

開催概要

日時 令和2年2月22日(土) 10:00 – 13:00 (開場9:30)

会場 TKP市ヶ谷カンファレンスセンター 8階大ホール

参加費 無料

対象 東京都内の保育所に勤務する保育士・関係者、行政担当者等

定員 300名

主催 東京都 (【事務局】株式会社日本総合研究所)

当日プログラム

開会挨拶	東京都知事 小池百合子
モデル事業の背景・趣旨説明	東京都福祉保健局
モデル事業の概要紹介	株式会社日本総合研究所
モデル事業の活動報告	モデル事業参加各施設
パネルディスカッション	汐見稔幸氏 東京大学名誉教授、日本保育学会会長、 社会保障審議会児童部会保育専門委員会委員長 内田幸一氏 認定こども園野あそび保育みつけ園長、 NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟理事長 関山隆一氏 もあな自然楽校理事長、森のようちえん全国ネットワーク連盟 副理事長、東京都市大学人間科学部非常勤講師 野村直子氏 new education LittleTree代表 宮里暁美氏 お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所教授

参加状況

保育所関係
74.1%

幼稚園・
こども園
9.5%

行政
関係
2.5%

その他・
不明
13.9%

3. 活動報告会の開催

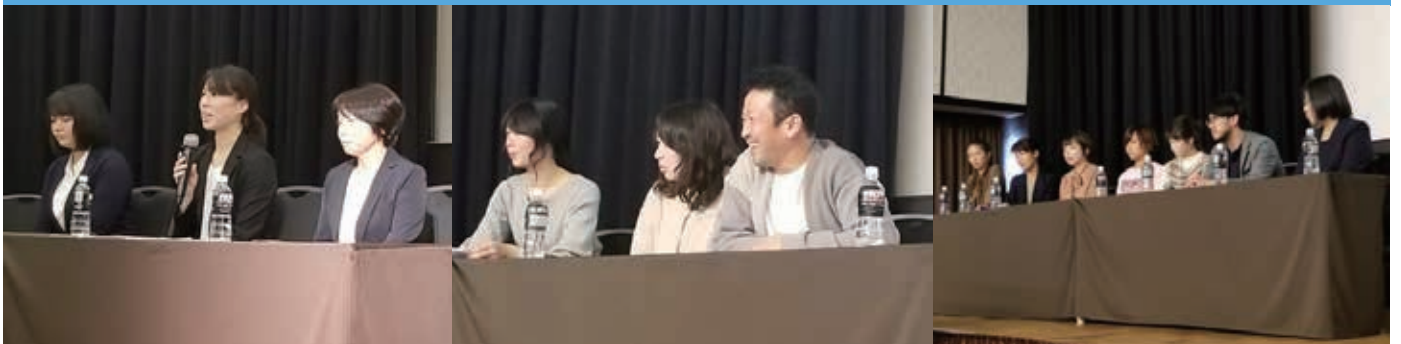
3.2. 活動報告会の様子

各プログラムの様子

モデル事業の背景・趣旨説明、概要説明



モデル事業の活動報告



パネルディスカッション



3. 活動報告会の開催

3.3. 各園からの活動報告 ①南千住七丁目保育園

報告のポイント

- 5歳児クラスを担当する2名の保育者と、園長先生により、動画や写真を参照しながら、各活動について報告を行った。

	報告のポイント
初回活動について	<ul style="list-style-type: none">● 自然を活用した保育の具体的な活動イメージ● 事業実施前の保育者の子供への接し方について
遠隔地活動について	<ul style="list-style-type: none">● 豊富な自然環境下においての子供や子供同士の行動の変化
最終活動について	<ul style="list-style-type: none">● 自然物に対する子供の感じ方、自然物を使った遊びなどの変化● 事業実施前と比較した保育者の子供たちへの接し方の変化
まとめ	<ul style="list-style-type: none">● 保育者としての考え方の変化● 本モデル事業を通じた自然を活用した保育へのイメージの変化

有識者からのコメント

- 南千住七丁目保育園の報告に対する有識者の主なコメントは以下の通り。

- 子供には元々感性的な資質があり、適切な環境があればだれでも開花するもの。南千住七丁目保育園の取組では、時間の経過と共に、保育者も含め子供が大きく変わっていく様子が分かりやすく感じられた。
- 短い期間で大きな変化がみられたことは素晴らしい。今後この取組を継続していく際、保育者の向き合い方や子供たちの姿はさらに変化し、保育者として考えることも増えていくはずだが、ぜひ、引き続き積極的に取り組んでほしい。
- 子供たちに対する向き合い方のエッセンスが凝縮されており、実際の変化もみられ、非常に有意義な取組だったと思う。
- 秋の終わりから冬という短い期間に、よくこれだけの変化がみられるようになったと思う。自然は個性の宝庫であり、これから続けていくともっと色々な変化が出てくるだろう。

3. 活動報告会の開催

3.3. 各園からの活動報告 ②せせらぎ保育園

報告のポイント

- 3~5歳児の3クラスのうちの一つを担当する2名の保育者と、園長先生により、動画や写真を参照しながら、各活動について報告を行った。

	報告のポイント
初回活動について	<ul style="list-style-type: none">● 棒を使った遊びについて、保育者の当初の不安と、実際に解禁してみて感じたこと● 初回活動の中でみられた子供たちの変化
遠隔地活動について	<ul style="list-style-type: none">● 活動前に保育者が想定していた子供たちの姿と、実際の姿のギャップについて
最終活動について	<ul style="list-style-type: none">● 初回活動から何度か雑木林での活動を繰り返したことによる子供たちの変化● 保育者としての、子供たちへの接し方の変化
まとめ	<ul style="list-style-type: none">● 本モデル事業を通じた自然を活用した保育へのイメージの変化● 保育者としての考え方の変化、今後取り組みたいこと

有識者からのコメント

- せせらぎ保育園の報告に対する有識者の主なコメントは以下の通り。

- 棒を使った遊びを解禁することに対する保育者のリアルな葛藤がみられたが、取り組んでいくうちに少しずつ、保育者も子供たちも棒を使った遊びに慣れてきた様子が見えてくる。ルールは繰り返すすぎると形骸化するので、ある程度浸透してきたら、勘違いしている子にそっと教えるにとどめるなど、少しずつ手を離していけると良いのではないかな。
- 穴と水と棒というのは、子供たちが大好きなもので「三種の神器」と言っても良い。棒を使った正しい遊び方を教え込むのではなく、どうしたら安全に遊べるかを子供たち自身に考えさせながら、遊びを広げていけるよう見守ると良いのではないかな。今回実施されていた、子供たちを交えた振り返りの機会も活用できそうである。
- 自然の中の遊びにおいては、必ずしも保育者がきっかけを作らなければならない、用意してあげたりする必要はない。はじめの一步を踏み出すのはいつも子供たちである。子供が周囲の環境をじっと観察していて「遊び出さない時間」というのがあるので、その時間も大切に見守っていきと良いのではないかな。

3. 活動報告会の開催

3.3. 各園からの活動報告 ③まちの保育園小竹向原

報告のポイント

- 今回対象となった3歳児4歳児クラスの担当保育者、全体担当の保育者、コミュニティコーディネーター、園長先生の計7名が登壇。
- 事業内で撮影した動画や写真を参照しながら、各活動について報告を行った。

	報告のポイント
園の方針について	<ul style="list-style-type: none">● 園が大事にしていること（子供と寄り添う姿勢など）● 園の方針に照らした際の本事業の参加の目的
導入研修について	<ul style="list-style-type: none">● 自然を活用した活動に対するイメージ、保育者の捉え方
初回活動について	<ul style="list-style-type: none">● 普段、園で実践している自然を活用した保育の様子
遠隔地活動について	<ul style="list-style-type: none">● 普段とは異なる、豊富な自然環境下においての子供や子供同士の行動の変化
まとめ	<ul style="list-style-type: none">● 本モデル事業を通じた保育者としての考え方の変化、今後取り組みたいこと

有識者からのコメント

- まちの保育園小竹向原の報告に対する有識者の主なコメントは以下の通り。
- 園の理念、文化がにじみ出ている取組で非常に参考になった。見守る＝何も言わない、と誤解する人がよくいるが、子供たちに寄り添い、自然と出てくる言葉を通して対話をしている様子がみられ、理想的な関わりをしていると感じた。
- 保育者自身が自分が感じたことをしっかり捉え、表現している点良かった。外に出ると常に、偶発的に別のことが起きていくものである。普段とは異なる場所での遊びにより、これまで関わりのなかった子供同士のつながりができた、という変化を捉えていたのは興味深い。
- 「聴く」ということはとても大事であると考えているが、そのことをしっかり実践されていて素晴らしいと感じた。変化にとんだ木、起伏、倒木など、子供がわくわくするために、なくてはならないものではないけれど、あったらいいと思う素材がたくさんある。そういう「場」の呼びかけに子供が惹きつけられる姿を、保育者が敏感に気が付き、感じとっている点良かった。
- 振り返りの時間を持つことは大事である。体験を振り返り、改善点を考えることで次の保育に繋がるため、これからもぜひ続けてほしい。

3. 活動報告会の開催

3.4. パネルディスカッション①

ディスカッションテーマ

- パネルディスカッションは、汐見稔幸氏をコーディネータとして、以下の3つのテーマについて意見交換、とりまとめいただいた。

- ① 保育に自然を活用することで得られる効果、重要性、意義
- ② モデル事業を踏まえた都市部での実践のポイント、課題
- ③ 自然の活用だけではなく、地域との関わり、街づくりなども考慮した目指すべき都市部での保育の姿

ディスカッション概要

① 保育に自然を活用することで得られる効果、重要性、意義

- 子供たちはすでに持っている、備えている力がたくさんある。自然を活かした活動の中でそれが発揮しやすい面があり、主体性、自主性などがより促されることが多い。
- 自然を活用した保育と自然保育という言葉では意味合いが異なると考えられる。自然を活用することは、より良い保育の実践を考えた際に、非常に有効な資源、アプローチであるといえる。海外の取組などをみても、創造性、共感性、自発性、主体性を発揮するために有効な取組といえるだろう。
- 自然の中で感じる、驚く、伝えたいとなるといったように心が動くことが大事である。そういった感情、それに伴う行動を止めないことによって、子供の中での物語が始まっていく。自然の活用によって子供の可能性は多様に広がっていくものである。
- 自然を活用する効果は、数えきれないくらいあるように感じる。大事なことは自然の中には、楽しさや心地よさだけでなく、厳しさやつらさもあるということ。より自分と向き合う状況になるのではないか。大人が環境を整えることで得られるものもあるが、自然の中ではそれ以外に得られるものが多いだろう。
- 子供が本来持っている力が引き出されるということだろう。それはつまり人が本来持っている自然性を取り戻すということではないか。自然性とはまさに、創造性、共感性、自発性などであり、自然をうまく活用することは、これらを引き出すための有効なアプローチということになるだろう。
- 自然には怖さもあるということは重要な視点である。自然に立ち向かうことで得られる経験もあるだろう。近年、人は五感のうち、二感（視覚、聴覚）が中心になりつつある。以前はもっと五感をフルに使っていた。嗅覚、味覚、触覚などを通じて感じることも多々あるはずである。自然の活用は五感をフルに使うことにもつながり、より知るといふことにつながっていくのではないか。

3. 活動報告会の開催

3.4. パネルディスカッション②

ディスカッション概要（続き）

② モデル事業を踏まえた都市部での実践のポイント、課題

- 大都市になればなるほど、自然から遠ざかるというイメージがあり、都市部での子供の育ちの環境が変わってきている面はある。しかし、都市部で自然を活用した保育ができるかどうか、で言えば、できるだろう。自然という環境の中で重要なことは子供が自ら気づくということで、大自然が必須ではない。季節の移り変わりなどを感じることは、都市公園や街中の街路樹などを通して感じることもできるはずである。それを促すような関わり、サポートができるかどうかの方がより重要だろう。
- 保育者の関わりによる面も大きく、人工物が多い環境でもできることである。東京都だからこその取組を考えられるはずである。
- 都市部の良さは、交通の便が良いという点があるだろう。公共交通機関を活用して自然のある場所に移動することもできるし、それ自体が重要な取組である。都市部ならではの利点・特性をどう活かすかという考え方、工夫があれば視野は広がる。
- 想定している場所に行くまでのプロセスも大事だ。“道草”も重視するとよい。道中の植物、生き物などに目を向けることも大事であり、目的地に行くことだけを大事にしすぎない考え方も必要だろう。
- “道”は非常に大事だ。危険もあるが、多様な出会いがある。自然だけではなく、人工的なものとの出会いも上手く活かしていくことが重要だろう。
- 大人が少し余裕を持てると、街中、道中の景色、自然に気づくのではないか。街路樹の葉っぱで多様なことを感じることもできる。保育者、保護者が少し余裕を持って視野を広げることも大事だろう。
- 自然≠豊かな森というものではない。少し視点を広げることで多様なものが活用できる可能性が出てくる。例えば日曜から土曜の曜日になぞらえた自然を考えることもできる。日曜であれば太陽、月曜は月、火曜は火、水曜は水、木曜は木々・植物、金曜は鉄、土曜は土・石といったように。太陽の動きやその影響も自然によるものであり、それに着眼した遊び・学びの実践も可能であり、教材として活かすこともできるはずである。さまざまな工夫などを検討すれば視野も広がっていくものであり、都市部で活用できる自然も広がっていくはずである。
- 自然を活用した保育は、人の自然性を取り戻す、あるいは活性化する営みと考えれば、それは街中にも存在している。従前はいろいろなことに「場」として“道”が活用されていた。子供の遊び場としての側面もあった。
- 子供にとっての“道”の活用を考えることは都市部ならではの取組ではないか。

3. 活動報告会の開催

3.4. パネルディスカッション③

ディスカッション概要（続き）

③ 自然の活用だけではなく、地域との関わり、街づくりなども考慮した目指すべき都市部での保育の姿

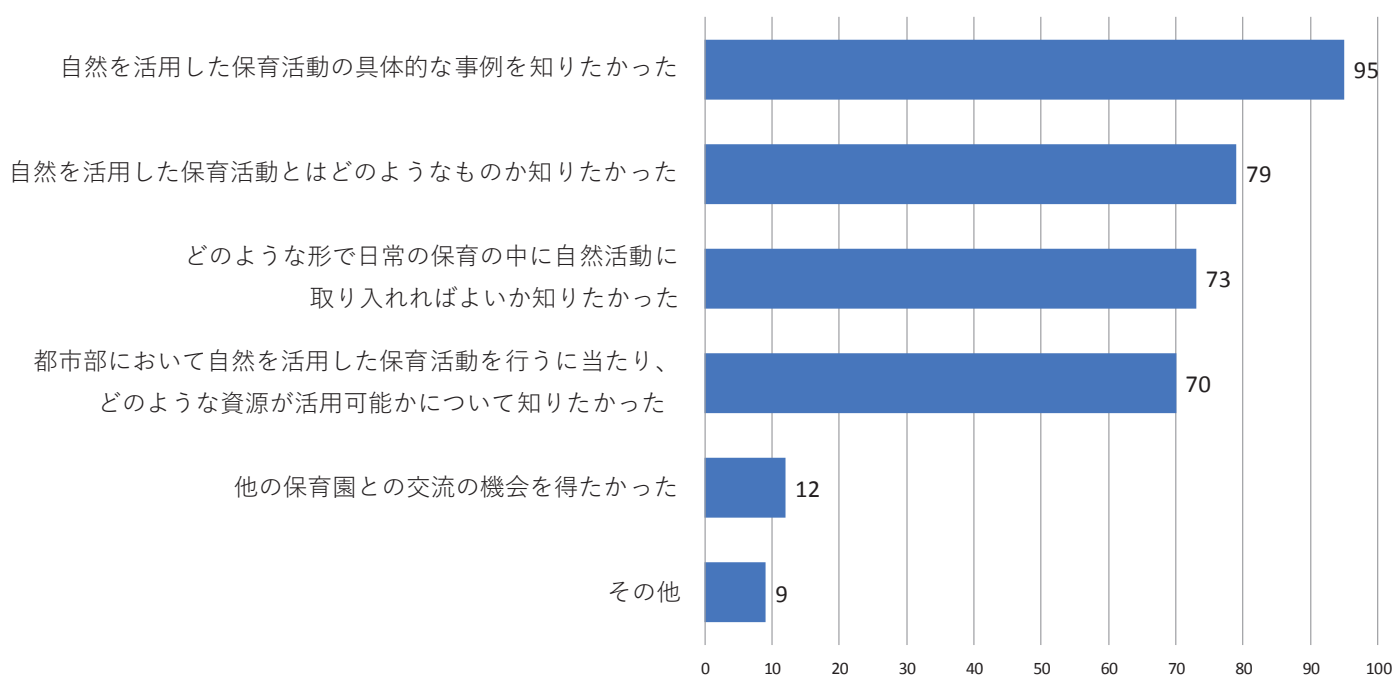
- かつて東京においても街中に子供の遊べる場所はたくさんあった。“道”などは子供の遊び場として非常にうまく生活に取り入れられており、人が集う場所、遊ぶ場所という側面があった。現在は子供の遊び場としての活用は難しくなっている。
- 海外では、子供の遊ぶ場所として道が解放されているケースがたくさんみられる。道の開放など、街の中で子供が自然体で遊ぶことができる環境を整えていくということも非常に大事になるだろう。
- 子供が共存できる、利用できる空間づくりは発想次第でできることがあるのではない。公園などを整備するというだけではなく、生活の中にどのように遊びの空間、場をつくっていくかという考え方も大事になる。
- 行政や地域の人と連携して子供が遊びやすい街をつくっていくという考え方も重要であろう。関係者を巻き込み、ともに考えて行くことも必要である。
- 道は非常に重要なものであり、その活用が広がっていけば多様な可能性が広がるのではない。道中の安心・安全が確保されれば、保育所等もより多様な活動が進むはずである。道という特性を活かすことができれば地域内での交流などが促進されることも期待される。
- 海外の取組などを鑑みると、周囲の大人が子供の暮らし、生活を支えるための工夫をしており、権利を保証しているように感じる。子供の権利にも配慮して地域づくり、街づくりを進めることも重要だろう。
- 改めて「自然を活用した保育」と「自然保育」の違いは重要と感じる。自然を活用した保育とは人の自然性を活性化するための保育と考えることができるだろう。自然性はさまざまな場面で問われており、子供・保育に限ったことではない。
- 子供だけではなく、高齢者なども含め、多世代が集まったり、活動したりする場を地域内に作っていくという視点も必要である。場合によっては保育所自体が地域の有効な社会資源となるだろう。
- 地域との関係性、街づくりは保育・子供視点だけで完結するものではない。より視野を広げて検討することで多様な取組の姿が生まれるのではない。
- 都市部ならではの地域づくり、街づくりの視点も踏まえて、自然を活用した保育の取組をさらに深めることが重要だろう。

3. 活動報告会の開催

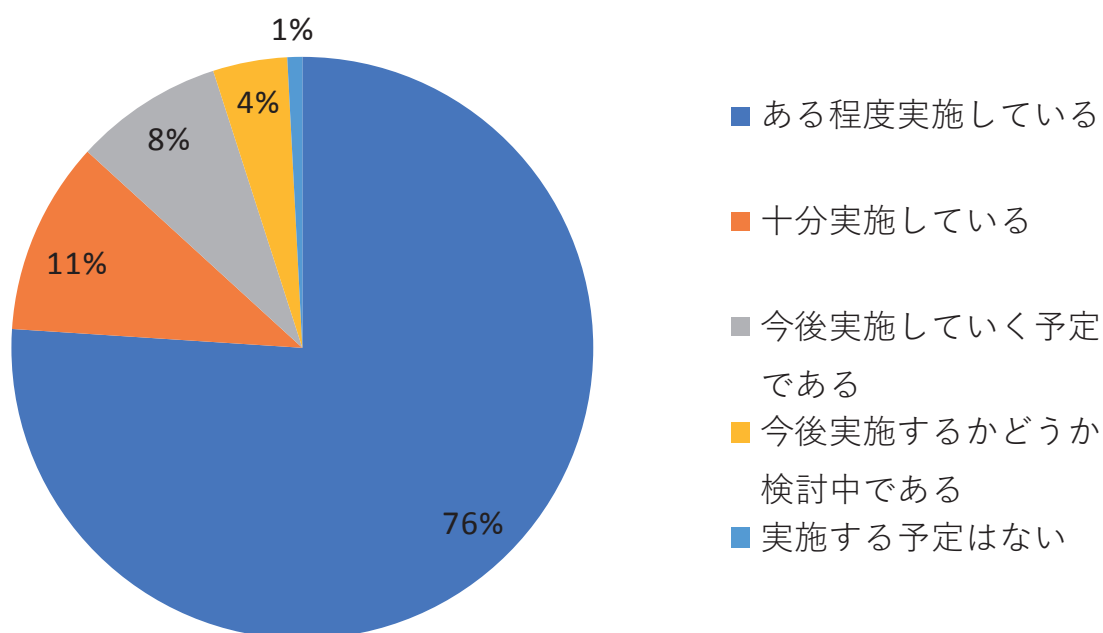
3.5. 参加者アンケート結果①

- 活動報告会への参加動機としては、「自然を活用した保育活動の具体的な事例を知りたかった」が特に多い。
- 参加した保育所等における自然活用への取組状況としては、大半が「ある程度実施している」との回答となった。

活動報告会参加動機 (n=137)



自然活用への取組状況 (n=121)

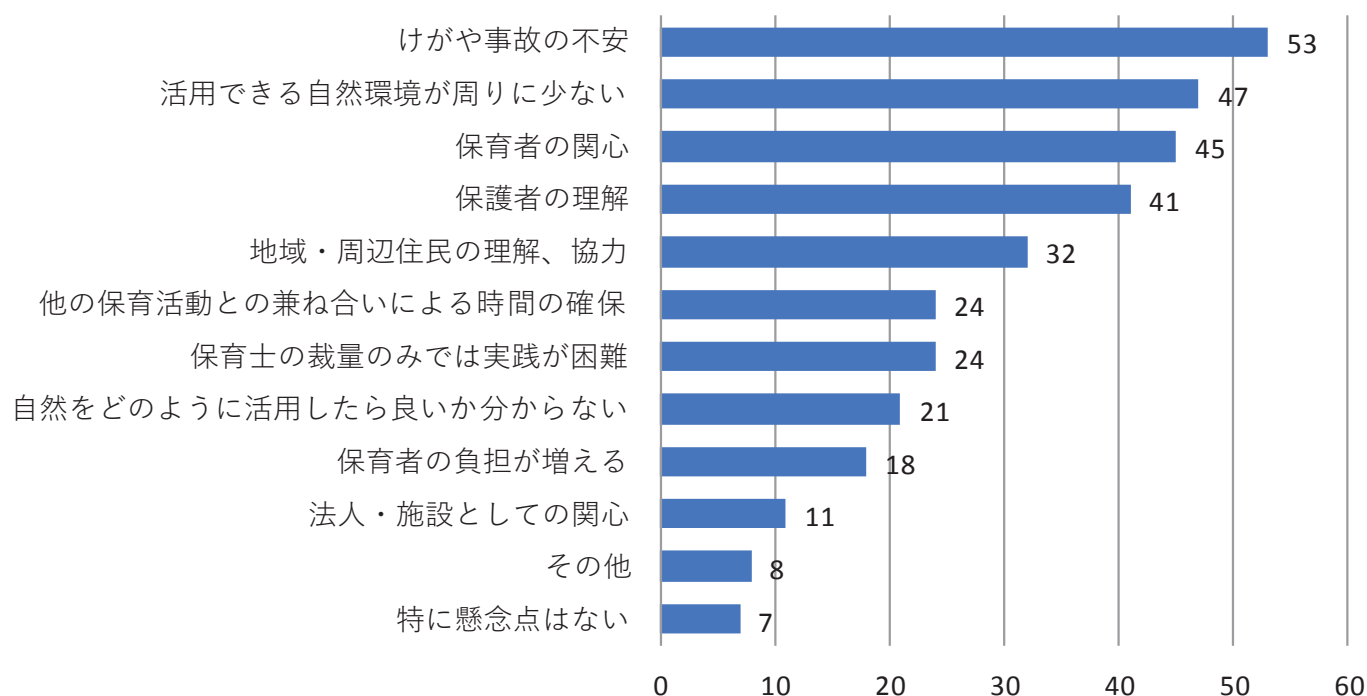


3. 活動報告会の開催

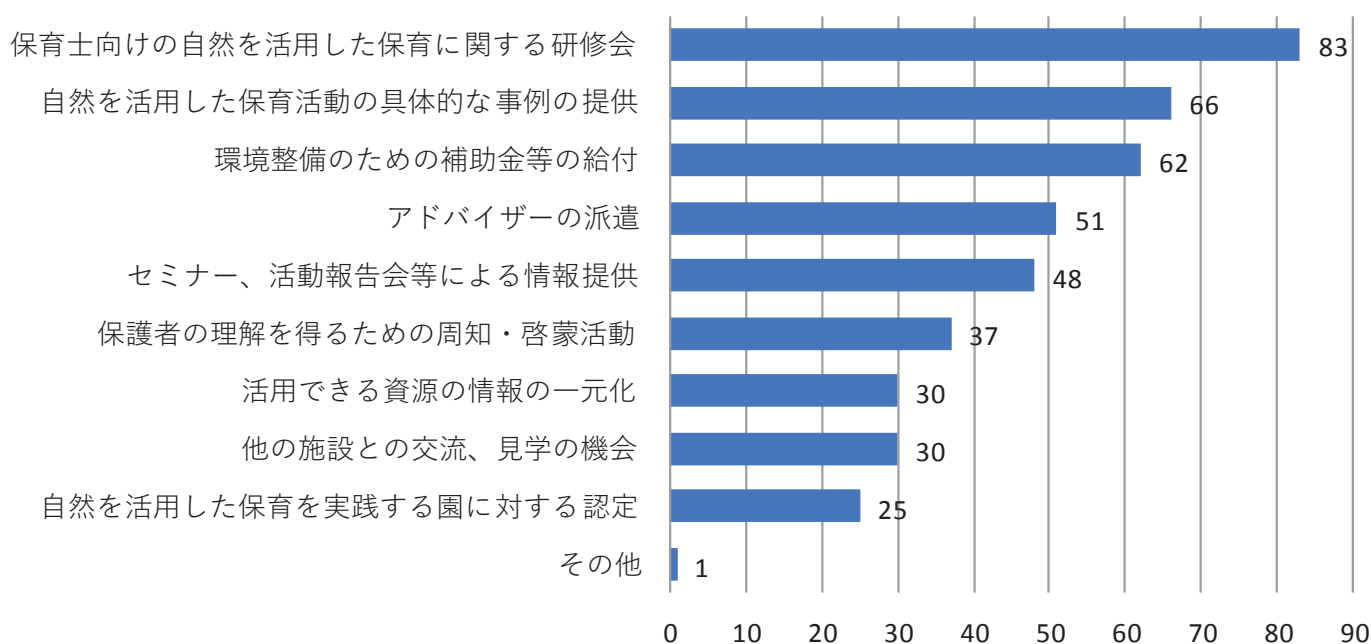
3.5. 参加者アンケート結果②

- 自然の活用に向けた課題・不安としては、「けがや事故の不安」、「活用できる自然環境が周りに少ない」、「保育者の関心」、「保護者の理解」が上位となった。
- 東京都等の行政への要望・期待としては、「保育士向けの自然を活用した保育に関する研修会」、「自然を活用した保育活動の具体的な事例の提供」が上位となった。

自然活用に向けた課題・不安 (n=137)



行政への要望・期待 (n=137)



4. モデル事業を踏まえたまとめ

4.1. モデル事業の成果

モデル事業を通じた成果

- 参加3施設でのモデル事業実施を通じて、以下のような結果・効果が得られたと考えている。

保育者の意識の変容、それに伴う子供との関わり方の変化がみられた

- 限られた期間ではあったものの、モデル事業を通じて、保育者側の子供への関わり方、接し方、安全対策についての意識の変容の兆しがみられた。
- 客観的に確認できるとともに、保育者との意見交換でも、考え方、意識が変わったという意見が挙げられており、意識変容のきっかけづくりに資する活動が展開できた。
- また、意識の変容を踏まえて、初回活動時と比較して、より見守りに徹するような子供との接し方への変化などもみることができた。
- これまで保育者として取り組んできたことについて、外部のアドバイザーから意見を得られたことで、自信を持って活動を進めることにもつながった。

子供たちの遊び方に変化の兆しがみられた

- 保育者側の接し方がより子供の主体性を引き出すものになりつつあることを受けて、子供たちの遊び方にも少しずつ変化が生じ、以前よりも没頭して遊びこむ様子や、独自の遊び方が生じるなど、さまざまな変化の兆しがみられた。
- 少しずつではあるが、遊びこむ様子が以前よりも増えてきていることから、今後、主体性、想像力、思考力などを育むための没頭、気づきにつながるような活動を行うことができた。

(一部ではあるが) 保護者・家庭での取組のきっかけとなった

- 保護者へのアンケート結果などから、今回のモデル事業を踏まえて、家庭において、子供の遊びに関する希望や発言内容に変化がみられたという意見があった。
- 子供の希望を踏まえて、家庭でも自然を意識した取組を行ったという保護者もおられ、一部ではあるものの、家庭の活動を促進するきっかけにもなった。

モデル事業における課題

- 今回のモデル事業は限定的な活動となり、以下のような課題が残ったと考えている。

- 実施期間・時期が限定されているため、より季節性のある取組が必要
- さらに都心部での自然の活用のあり方を模索する取組が期待される
- 公園などに限らず、よりさまざまな、都会ならではの自然を活かすための視点を踏まえた活動を行うことが期待される
- 対象年齢を拡大した取組の検討、乳児を考慮したモデルの検討が期待される
- 保育者や保護者への周知・理解促進のための情報提供等も前提として必要
- 活用できる資源情報の集約、一元化など、多様な施設の取組を進めやすくするような支援を検討することも重要

4. モデル事業を踏まえたまとめ

4.2. 都市部で自然を活用していくための課題

モデル事業を通じて確認した不安・懸念点

- モデル事業を通じてのヒアリング、意見交換、保育者へのアンケートなどから、自然を活用するうえでの不安、懸念として以下のような点が挙げられた。

- ✓ 周囲の自然環境が不足している
- ✓ 現状の自然、環境をどのように活用していけば良いかよく分からない
- ✓ ケガや事故のリスクが不安（棒なども持たせてよいのか）、安全確保のために十分な人員を割くことができるか
- ✓ 特に異年齢保育を実施している場合、発達段階が異なる子供たちが同じように自然の中で遊ぶことができるか
- ✓ 保護者の理解が得られるか
- ✓ 準備に十分な時間が割けるか

- 活動報告会において実施した参加者アンケートにおいても以下のような回答が得られている。
- 不安・懸念点は概ね同様のものとなったが、行政への要望・期待事項として研修や事例の提供など、周知・理解促進の取組が上位となっており、不安・懸念の払しょくのための情報提供が期待されている可能性が示唆される。

- ✓ 自然の活用に向けた課題・不安としては、「けがや事故の不安」、「活用できる自然環境が周りに少ない」、「保育者の関心」、「保護者の理解」が上位
- ✓ 他方、行政への要望・期待としては、「保育士向けの自然を活用した保育に関する研修会」、「自然を活用した保育活動の具体的な事例の提供」が上位

【参考】

- 本事業の一環として、自然を活用した保育の普及に係るセミナー（2019/12/22）を実施した際の、参加者アンケートにおける課題認識としては、「自身の自然経験が不足している」、「自然をどのように活用したら良いか分からない」、「活用できる自然環境が周りに少ない」が上位となっており、自身の体験の不足への対応も期待されている。

対応の方向性

- 上記のような課題を踏まえると、今後東京都等の都市部において一層の自然の活用を促していくためには以下のような対応が重要になると考えられる。



自然を活用した保育についての保育者・保護者向けの情報発信・理解促進



東京都内で活用できる環境・資源情報の把握



都市部ならではの自然を活用した取組のモデル化、情報還元



資源を有効に活用するための地域・関係者を巻き込んだ取組の試行

4. モデル事業を踏まえたまとめ

4.3. 自然を活用した保育のさらなる促進に向けて

さらなる取組促進のための検討事項

- 今回のモデル事業を通じて得られた成果、課題等を考慮し、次年度以降も自然を活用した保育の取組に関する各種検討を継続していくことを予定している。
- 以下のような事項を検討事項としてさらなる調査・検討を重ね、自然を活用した東京都版保育モデルの取組推進を図っていく。

モデル事業の 拡大・深耕・多様化

- 年間を通じた、より季節性のあるモデル事業実施の検討（四季・年間を考慮した展開の模索）
- モデル事業対象年齢の拡大の検討（乳児等を含めたモデル事業実施可能性の模索）
- より都市型、都市部ならではのモデル事業活動の検討（山手線の内側エリアでのモデル事業の模索）
- 汎用的な取組モデルの整理（地域特性格など、パターン別での取組事例の情報整備）

自然を活用した保育の 普及・啓発促進

- 自然を活用した保育に係る、普及・理解促進のためのセミナー等の情報発信の継続実施の検討（保育者、保護者向けの周知・理解促進の取組）
- 保育者、保護者にとって有用な、提供可能な情報の集積、汎用的なコンテンツ・資料整備の検討
- 自然を活用した保育に係るセルフチェックリスト、客観的な評価項目・評価方法等の検討

自然を活用した保育を 推進する基盤整備

- 都内の活用できる資源情報の把握に向けた検討
- 自然を活用した保育に係る人材育成に向けた検討
- 他の施設を訪問して活動を体験する研修等の検討
- 地域との連携を見据えた取組方策の検討

効果の把握・検証

- 長期的な効果検証のための仕組み・方策検討（長期目線でどのような効果があるか、どのように把握するか）

【参考】

有識者会議の構成メンバー・開催概要

有識者会議メンバー

汐見稔幸氏	東京大学名誉教授、元白梅学園大学学長。日本保育学会会長。 社会保障審議会児童部会保育専門委員会委員長。 一般社団法人家族・保育デザイン研究所代表理事。 専門は教育学、教育人間学、保育学、育児学。保育・幼児教育関連著書多数。
内田幸一氏	NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟理事長。 野あそび保育みつけ園長。 長野県野外保育連盟理事長。
関山隆一氏	NPO法人もあな自然楽校理事長。1998年ニュージーランドに渡り国立公園にて現地ガイドとして働く。2004年に帰国後アウトドアオペレーターの事業を立ち上げ、2007年もあなキッズ自然楽校設立。森のようちえんや自然体験活動を通して、長期的な子育て支援環境の確立および地域に根差した実践を行っている。NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟副理事長として、日本の森のようちえんの普及活動に力を注ぐ。東京都市大学人間科学部非常勤講師。
宮里暁美氏	お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所教授。 文京区立お茶の水女子大学こども園園長。 平成28年4月に開園した文京区立お茶の水女子大学こども園園長として園運営に携わり、「つながる保育」を主軸に置いた教育・保育活動を展開する。豊かな体験を生み出す環境作りを進めるとともに保育者の援助について検討し、こども園の教育・保育課程を作成、発信する。幼児と環境の関わりに関する著作多数。
野村直子氏	new education LittleTree代表。「子供」と「自然」をキーワードに、子供と自然環境に関わり約20年。国内外での保育と自然体験活動などの経験を重ね、“森のようちえん”の活動に関わる。保育室園長や自然学校などの経験を生かし、国内外の保育園・幼稚園研修、講演会などを通して、新しい保育・教育の視点を提案し、保育の質を伝えている。

開催実績・検討内容

回	開催日程	検討事項
第1回	令和元年12月18日（水） 10：00～12：00	<ul style="list-style-type: none">モデル事業の進捗確認・進め方の検討事前研修・アンケート内容の確認・検討今後の実施予定・検討事項の確認・検討
第2回	令和2年1月23日（木） 10：00～12：00	<ul style="list-style-type: none">モデル活動の取組状況確認効果検証・課題把握のための調査の検討活動報告会での報告事項等の検討
第3回	令和2年2月18日（火） 13：00～15：00	<ul style="list-style-type: none">活動報告会の実施内容の確認・検討今後の取組課題の検討報告とりまとめに向けた検討